

山梨県南アルプス市  
Sakanoueubagami  
坂ノ上姥神遺跡

南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015. 3  
坂ノ上姥神遺跡調査団  
南アルプス市教育委員会  
有限会社ヒロキハウジング・有限会社ホームズ

山梨県南アルプス市  
Sakanoueubagami  
坂ノ上姥神遺跡

---

南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015. 3

坂ノ上姥神遺跡調査団  
南アルプス市教育委員会  
有限会社ヒロキハウジング・有限会社ホームズ



## 例　　言

1. 本報告書は、山梨県南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘の調査主体は坂ノ上姥神遺跡調査団であり、調査は斎藤秀樹（南アルプス市教育委員会文化財課）が担当した。
3. 発掘調査期間は平成 15 年 9 月 3 日～9 月 30 日である。
4. 本書の執筆・編集は斎藤が行った。
5. 調査で得られた出土遺物およびすべての記録は、南アルプス市教育委員会に保管してある。
6. 試掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。  
記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）

平野 修、室伏 敬、公益財團法人山梨文化財研究所



## 凡　　例

1. 遺跡全体のグリッドは土地区画を利用した任意のグリッドであり、平面直角座標第VIII系に基づくものではない。ただし坂ノ上姥神遺跡第2地点とグリッドは共通している。

2. 遺構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

(1) 遺構 住居址 ······ 1/40

カマド ······ 1/20

土坑 ······ 1/40

(2) 遺物 土器 ······ 1/3

鉄製品 ······ 1/2

石器 ······ 1/2

3. 遺構図中で使用したスクリーントーンおよび遺物分布図におけるドットの凡例は以下のとおりである。

(1) スクリーントーン



(2) 遺物分布図におけるドットは次の遺物を表す。

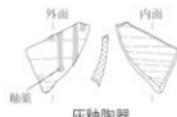
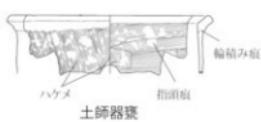
土器 ······ ●

鉄 ······ ▲

石 ······ ■

4. 遺構断面図、エレベーション図における数値表示は標高を表す。

5. 土器の実測図の表現は、以下のとおりである。破片資料の場合、断面図の右側に内面を、左側に外面を書き表現した。



6. 掃図中の遺物番号、遺物観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

# 目 次

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
1. 御勅使川と御勅使川扇状地	
2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の地形	
第2節 歴史的環境	4
1. 御勅使川扇状地北部の歴史環境	
2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の調査事例	
第Ⅲ章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	11
第3節 遺構と遺物	15
1. 竪穴住居址	
2. 上坑	
第Ⅳ章 理科学的分析	39
第1節 坂ノ上姥神遺跡の自然科学分析	39
第Ⅴ章 総括	42
第1節 集落の変遷	42
第2節 調査の成果と課題	45
写真図版	

## 表 目 次

- 第1表 土坑計測表（第6・17図）  
第2表 土器観察表（第18～23図）  
第3表 石器観察表（第20・23図）  
第4表 鉄製品観察表（第23図）  
第5表 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡検出暨穴住居址一覧

## 挿 図 目 次

- 第1図 開発計画図および遺構の保存範囲  
(1/1,000)  
第2図 御勅使川扇状地地形分類図および遺跡分布図  
(1/25,000)  
第3図 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡と調査地点  
(1/2,500)  
第4図 基本層序柱状図（1/20）  
第5図 坂ノ上姥神遺跡試掘調査および本調査範囲  
(1/300)  
第6図 坂ノ上姥神遺跡全体図（1/80）  
第7図 1号住居址平・断面図および遺物分布図  
(1/40)  
第8図 1号住居址北カマド平・断面、掘方図（1/20）  
第9図 1号住居址東カマド平・断面、掘方図  
(1/20)  
第10図 2・3号住居址平・断面図（1/40）  
第11図 2・3号住居址遺物分布図（1/40）  
第12図 2号住居址カマド平・断面、掘方図（1/20）  
第13図 5号住居址平・断面図および遺物分布図  
(1/40)、カマド平・断面図（1/20）  
第14図 6号住居址平・断面・エレベーション図  
(1/40)  
第15図 6号住居址遺物分布図（1/40）  
第16図 6号住居址カマド平・断面、掘方図（1/20）  
第17図 土坑平・断面・エレベーション図（1/40）  
第18図 1号住居址出土遺物（1/3）  
第19図 2号住居址出土遺物（1/3）  
第20図 2号住居址出土遺物（1/3・1/2）  
第21図 3・5号住居址出土遺物（1/3）  
第22図 6号住居址出土遺物（1/3）  
第23図 6号住居址、1・3号土坑、遺構外出土遺物  
(1/3・1/2)  
第24図 坂ノ上姥神遺跡検出された暨穴住居址および  
溝状遺構（1/1,000）  
第25図 坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡変遷（1/4,000）

# 写真図版目次

## 写真図版 1

1. 調査区全景（北から）
2. 調査区全景（南から）
3. 1号住居址（南から）
4. 1号住居址遺物出土状況（北から）

## 写真図版 2

1. 1号住居址全景（東から）
2. 1号住居址北カマド遺物出土状況（南から）
3. 1号住居址北カマド（南から）

## 写真図版 3

1. 1号住居址北カマド覆土堆積状況および遺物出土状況（南から）
2. 1号住居址内ピット1断面（南から）
3. 1号住居址東カマド（西から）

## 写真図版 4

1. 2号住居址全景（西から）
2. 2・3号住居址全景（南から）
3. 2号住居址カマド（西から）

## 写真図版 5

1. 2号住居址カマド掘方（西から）
2. 3号住居址全景（東から）
3. 3号住居址全景（西から）

## 写真図版 6

1. 5号住居址全景（西から）
2. 5号住居址全景
3. 5号住居址カマド

## 写真図版 7

1. 6号住居址全景（西から）
2. 6号住居址全景（北から）
3. 6号住居址カマド（西から）

## 写真図版 8

1. 6号住居址明褐色土堆積状況（北西から）
2. 6号住居址刀子出土状況
3. 6号住居址遺物出土状況（北から）

## 写真図版 9

1. 1・2号土坑他（西から）
2. 3号土坑全景（北西から）
3. 1号土坑（北東から）
4. 2号土坑（西から）

## 写真図版 10

1. 土坑検出状況（AT～AU 9～10）（西から）
2. 土坑検出状況（AV～AW 9～10）（西から）
3. 土坑検出状況（AY～AZ10）（北西から）

## 写真図版 11

1. 調査風景

## 写真図版 12

1. 1号住居址出土遺物

## 写真図版 13

1. 1・2号住居址出土遺物

## 写真図版 14

1. 2号住居址出土遺物

## 写真図版 15

1. 2号住居址出土遺物

## 写真図版 16

1. 3・5・6号住居址出土遺物

## 写真図版 17

1. 6号住居址出土遺物

## 写真図版 18

1. 6号住居址出土遺物

## 写真図版 19

1. 6号住居址、1・3号土坑、遺構外出土遺物

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成15年7月、有限会社ヒロキハウジング代表取締役手塚英樹氏および有限会社ホームズ代表取締役深澤浩樹氏（以下工事主体者）によって南アルプス市徳永1855、1856番地に宅地造成工事が計画された。当該地は南アルプス市埋蔵文化財保蔵地坂ノ上姫神遺跡（HT-40）内に位置する。そのため文化財保護法第57条の2に従い、平成15年7月16日付けで工事主体者から南アルプス市教育委員会（以下市教委）を経由して山梨県教育委員会（以下県教委）へ関係書類が提出された。

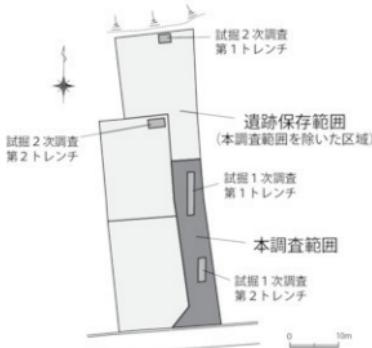
平成15年7月11日付けで、工事主体者の代理人である有限会社アルファ測量村松努氏から埋蔵文化財試掘・確認調査（以下試掘調査）の依頼が市教委にあった。両者の協議の結果、試掘調査を実施することで合意し、土地所有者承諾のもと、平成15年7月31日～8月1日試掘調査を実施した。その結果、多数の土坑およびカマドを作り住居跡を確認した。なお、平成15年8月4日付け、教学文3第7-87号にて試掘調査の実施が、県教委から工事主体者へ通知されている。調査結果を踏まえ、市教委と工事主体者で埋蔵文化財の保存について協議を行った。協議の結果、住宅部分は設計変更を行い、遺構確認面と掘削面との間に県教委が埋蔵文化財事務取扱要項の「別表2記録保存のための発掘調査をする場合の基準」で定める30cm以上の保護層を設けて遺構に影響が及ぼないものとし、発掘調査対象外とした。道路部分については構造上設計変更ができないこと、上記の保護層が確保できないため、発掘調査を行うことで合意した。発掘調査については、市教委と工事主体者で坂ノ上姫神遺跡調査団（以下調査団）を組織し、工事主体者から委託を受け調査団が実施することとし、市教委、工事主体者、調査団3者で委託契約書を締結した。

## 第2節 調査の経過

平成15年9月3日に発掘調査を開始し、平成15年9月30日に調査を終了した。



調査前の状況



第1図 開発計画図および遺構の保存範囲 (1/1,000)

9月3日（水）重機で表土掘削。  
9月4日（木）遺構確認。  
9月5日（金）遺構確認。  
9月8日（月）遺構発掘調査。  
9月9日（火）遺構発掘調査。  
9月10日（水）1、2、5号住居址および土坑調査開始。  
9月11日（木）1、2、5号住居址および土坑調査。  
9月12日（金）1、2、5号住居址調査。  
9月13日（土）6号住居址調査開始。  
9月15日（月）6号住居址調査。  
9月16日（火）1、2、5号住居址調査。  
9月17日（水）6号住居址調査。  
9月18日（木）1号住居址測量。3号住居址調査開始。  
9月19日（金）1～3号住居址セクションベルト掘削。  
9月20日（土）2号住居址調査。  
9月22日（月）2、3号住居址写真撮影。  
9月23日（火）2、3号住居址測量。6号住居址調査。  
9月24日（水）6号住居址測量およびレベリングなど。  
9月25日（木）遺構測量。  
9月26日（金）全体清掃および全景写真撮影。  
9月29日（月）調査終了。  
9月30日（火）現場撤収。

調査組織の体制は以下のとおりである。

調査主体 坂ノ上姫神遺跡調査団  
調査団長 谷口一夫  
調査担当者 斎藤秀樹  
作業員 長田由美子、小林素子、桜井理恵、穂坂美佐子、保延 勇、望月典子

### 第3節 整理等作業の経過

整理作業は平成23年5月9日に着手し、遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、トレースおよび遺構図の作成、写真的整理を行い、編集作業後、平成27年3月の報告書刊行を持って終了した。整理作業体制は以下のとおりである。

調査主体 坂ノ上姫神遺跡調査団  
調査団長 谷口一夫  
調査担当者 斎藤秀樹  
整理作業員 小林素子、桜井理恵、穂坂美佐子

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 御勅使川と御勅使川扇状地

南アルプス市の北端を流れる御勅使川は、巨摩山地のドノコヤ峰（約1,518 m）の東麓に源を発し、山地を流下して塩前付近で平地に入り、市の北側を東流して釜無川に合流する、総延長 18.78km の河川である。古くから暴れ川として有名で、巨摩山地の山々を削りながら大量の砂礫を下流へ供給し、甲府盆地西部に東西約 7.5km、南北約 10km、面積約 49k m<sup>2</sup> にわたる御勅使川扇状地を形成している。坂ノ上姥神遺跡はこの扇状地の扇端部に立地している。

扇状地は地表の主体が砂礫のため地下水位が低く、水の乏しい乾燥した土地となる。御勅使川扇状地の扇尖部に位置する上八田・西野・在家塚・上今井・桃園・吉田・小笠原の集落は、近世から「原七郷」と呼ばれ、「お月夜でも焼ける」と言われるほどの常襲早魃地域であった。そのため近世での主な生業は木綿や煙草、柿などの畑作が主体で、こうした作物を行商で売る生活様式がこの地域の特徴となっていた。昭和40年代に入ると徳島堰（寛文11年に完成した灌漑水路）の水を利用した畠かんの整備が進み、現在は水はけのよい土地であることを利用してブドウやモモ、サクランボなど果樹栽培が盛んな地域となっている。

こうした扇状地を造りだした御勅使川は、現在でこそ河道が固定されているが、過去に何度も流路の変更を繰り返してきた。現在南アルプス市北部を東西に走る県道甲斐芦安線が、明治30年まで御勅使川の流路であったことは広く知られている。かつてのこの流路は、地元で「前御勅使川」と呼ばれ、昭和に入り「四間道路」が整備され、その後高度経済成長期の開発の波をうけるまでは県道沿いに旧堤防が残り、付近には家屋も少ないという河川としての面影を色濃く残していた。この前御勅使川は遺跡の分布状況や庄名の研究等から、戦国時代にはすでに流れていたことが確実視されている。流路上には、運搬されてきた砂礫によって浸食崖が埋め立てられ、下流に小扇状地が形成されており、一定期間、御勅使川の本流であったことがうかがえる（第2図）。

前御勅使川以前の流路については、1969年に刊行された『白根町誌』で有野から西野を経由し現在の白根高校付近に至るルートがすでに図示されている。1990年代に入ると市内を南北に貫く中部横断自動車道に伴う試掘調査や航空写真からの研究によって科学的な証拠が提示され、現在では流路の具体的なルートがわかりつつある。また、百々地区に位置する百々遺跡の発掘調査から、この流路は平安時代から中世にかけて本流があったと推測されており、「御勅使川南流路」と名付けられている。巨視的に見れば、坂ノ上姥神遺跡は前御勅使川と御勅使川南流路の間に立地している。

#### 2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の地形

御勅使川扇状地扇端部に立地する坂ノ上姥神遺跡周辺の地形は、扇状地にそって緩やかに東側に傾斜している。調査地点の西端は標高 313.9 m、東端は 312.5 m を数え、比高差 1.4 m を測る。遺跡の東端は、御勅使川扇状地を釜無川が浸食して形成した崖が南北に走り、遺跡の立地する崖上と崖下の比高差は約 10 m に及ぶ。ただし県営団地東側の崖線は、開発によって西側へ掘削されたものであり、本来の崖線はやや東側を走っていたと考えられる（第3図）。

遺跡の北側は御勅使川の支流によって形成されたと推測される深い谷が東西に走っている。一方、南

側約360mの付近でも御勅使川の支流の痕跡が見られ、浸食崖を削る浅い沢が形成されている。崖下の低地上にはそれぞれの支流によって造られた複数の小扇状地が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 御勅使川扇状地北部の歴史環境

本遺跡（1）が位置する御勅使川扇状地北部地域の歴史環境について時代を追いながら見ていきたい（第2図）。

最も古い遺跡として、縄文時代中期の遺物が採取された赤山遺跡（2）があげられる。赤山遺跡は葦崎から続く竜岡台地の南端である赤山に位置している。縄文時代後期では、上八田堂前遺跡（3）や上八田下村遺跡（4）、徳永・御崎遺跡（5）、百々・上八田遺跡（6）が徳永、上八田両地区の浸食崖上に立地し、各遺跡からは、敷石住居址や配石遺構が発見されており、扇状地扇端部へも集落が進出した形跡が認められる。縄文晩期～弥生時代中期では、扇状地扇端部から扇央部までの地域に遺跡が確認できる。野牛島地区の大塚遺跡（7）や石橋北屋敷遺跡（8）、立石下遺跡（9）では条痕土器とともに弥生時代中期から後期の土器片が検出されている。また、扇央部に位置する横堀遺跡（10）でも縄文時代晚期から弥生時代前期の土器や石器が発見されている。

古墳時代前期では、大塚遺跡で竪穴住居址が6軒検出され、櫛原・天神遺跡（11）では前期の高杯を伴う畠状遺構が発見されている。後期では扇状地扇端部に立地する徳永・御崎遺跡第2地点（5）で竪穴住居址が1軒発見されており、数が少ないながらも扇状地扇端部に後期集落が存在したことが明らかとなった。一方、御勅使川南流路の南、上今諏訪地区的御勅使川扇状地扇端部には後期古墳のおつき穴古墳（12）がある。現在は1基のみが確認されているだけだが、本来は群集墳であったと考えられる。

古代に入ると遺跡数は増加し、集落範囲も拡大する傾向となる。奈良時代8世紀初頭から平安時代9世紀中頃にかけて、野牛島地区に遺跡が集中し、大塚遺跡や野牛島・大塚遺跡（13）、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡、野牛島・西ノ久保遺跡（14）で集落跡が検出されている。扇状地扇端部に目を移すと、坂ノ上姫神遺跡で8世紀代から9世紀の竪穴住居址が発見されている。こうした遺跡の分布から、8世紀代では、野牛島地区および徳永地区的扇状地扇端部に集落が営まれた傾向がわかる。

9世紀から10世紀に入ると状況は変化を見せる。野牛島地区では、検出された竪穴住居址が9世紀中頃から減少する一方で、前御勅使川を挟んだ南側の百々遺跡（15）では、9世紀初頭から集落が形成され、9～10世紀代を中心とした奈良・平安時代の竪穴住居址が250軒以上発見されたほか、鍊や石帶など公的機関の存在を示す遺物や、牧の存在を示唆する牛馬の獣骨などが100個体以上検出され、役所を基盤とした中心的な集落が存在したと考えられている。前御勅使川右岸に位置する櫛原・天神遺跡でも10世紀代の竪穴住居址が検出されている。また、百々遺跡の東側には平安時代創建の伝承をもち、平安時代中期の十一面觀音立像を本尊とする真言宗の長谷寺が立地している。以上の状況から、9世紀に入ると前御勅使川右岸扇央部の百々地区から扇端部の上八田地区にわたる広い範囲にいくつかの集落が展開したと推測される。

中世で代表される遺跡は石橋北屋敷遺跡である。13～16世紀の遺構が検出されており、竪穴住居址や掘立柱建物址、両側に側溝をもつ幅約4mの道路跡やそれに直交する区画溝など、計画的な土地利用の状況をうかがうことができる。同遺跡では16世紀後半の土坑墓も多数発見されており、この時期に墓地化したと推測されている。能藏池の西端に位置する野牛島・大塚遺跡第2地点でも中世の区画溝、

土坑墓が検出されており、古代と比べ集落の中心が現在「古屋敷」や「北屋敷」と呼ばれる能蔵池北西部へと移動している可能性が指摘できる。

一方、石橋北屋敷遺跡と御勅使川旧流路上に位置する仲田遺跡（16）では、中世から近世までの水田床土層が砂礫層と互層で何層も発見されており、戦国時代から現代まで継続的に水田耕作が営まれていたことが明らかとなっている。

こうした集落遺跡や生産遺跡のほかに、御勅使川、前御勅使川、釜無川沿いには堤防をはじめとする治水施設が築かれてきた。その中で、釜無川沿いでは上高砂地区に位置する壱番下堤跡（17）で近世の堤防跡が発見され、さらに南に位置する徳永地区と下高砂地区では天保8年（1837）に築堤された百間堤（18）<sup>(11)</sup>と呼ばれる堤防の調査が行われている。また武田信玄築堤の伝承をもつ石積出四番堤（19）<sup>(12)</sup>や六科将棋頭（20）<sup>(13)</sup>の調査では、根固めに「梯子土台」や「木工沈床」を用いた遺構が検出され、現在の遺構が明治大正期に改修されたものであることが明らかにされている。

## 2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の調査事例

坂ノ上姥神遺跡周辺は南アルプス市の中でも遺跡が集中している地域である。遺跡が立地する御勅使川扇状地扇端部は、供給される御勅使川の土砂の堆積が少なく、遺構確認面は扇央部と比較して非常に浅い。そのため地表に露頭する遺物も多く、その結果、発見される遺跡も広範囲なものとなっている。

遺跡周辺で確認された最も古い遺構は縄文時代後期の集落跡である。まず旧白根町時代の昭和47年10月、上八田下村遺跡でぶどう棚と給水管の設置工事に伴い、地表下約80cmの地点から敷石や焼土、土器片が検出された。ここから東へ約70mの地点に位置する上八田堂前遺跡でも昭和59年9月、サクランボ畑の掘削に伴う調査によって、地表下約50cmの地点から、中に安山岩の転石37個と花崗岩1個が敷き詰められた直径3.4mを測るほぼ円形の配石遺構が発見され、縄文時代後期の集落跡の存在が示唆された（第3図）。平成12年には、上八田堂前遺跡から東へ約170m地点に位置する徳永・御崎遺跡で、旧八田村教育委員会によって集合住宅浄化槽部分の調査が実施され、縄文時代後期の配石遺構が検出された。平成15年に6町村が合併して南アルプス市が誕生し、平成16年に市教育委員会によって南に隣接する徳永・御崎遺跡第3地点の調査が行われ、同時期の敷石住居址が発見されている。平成17年には上八田堂前遺跡の北側、百々・上八田遺跡（上八田1557地点）で、個人住宅の浄化槽設置に伴い同教育委員会によって縄文時代後期初頭の敷石住居址が検出され、その柱跡からタイの第2椎骨を検出している。その骨は現時点で山梨県において海産魚を食料としたことを示す最古級の資料となっている。

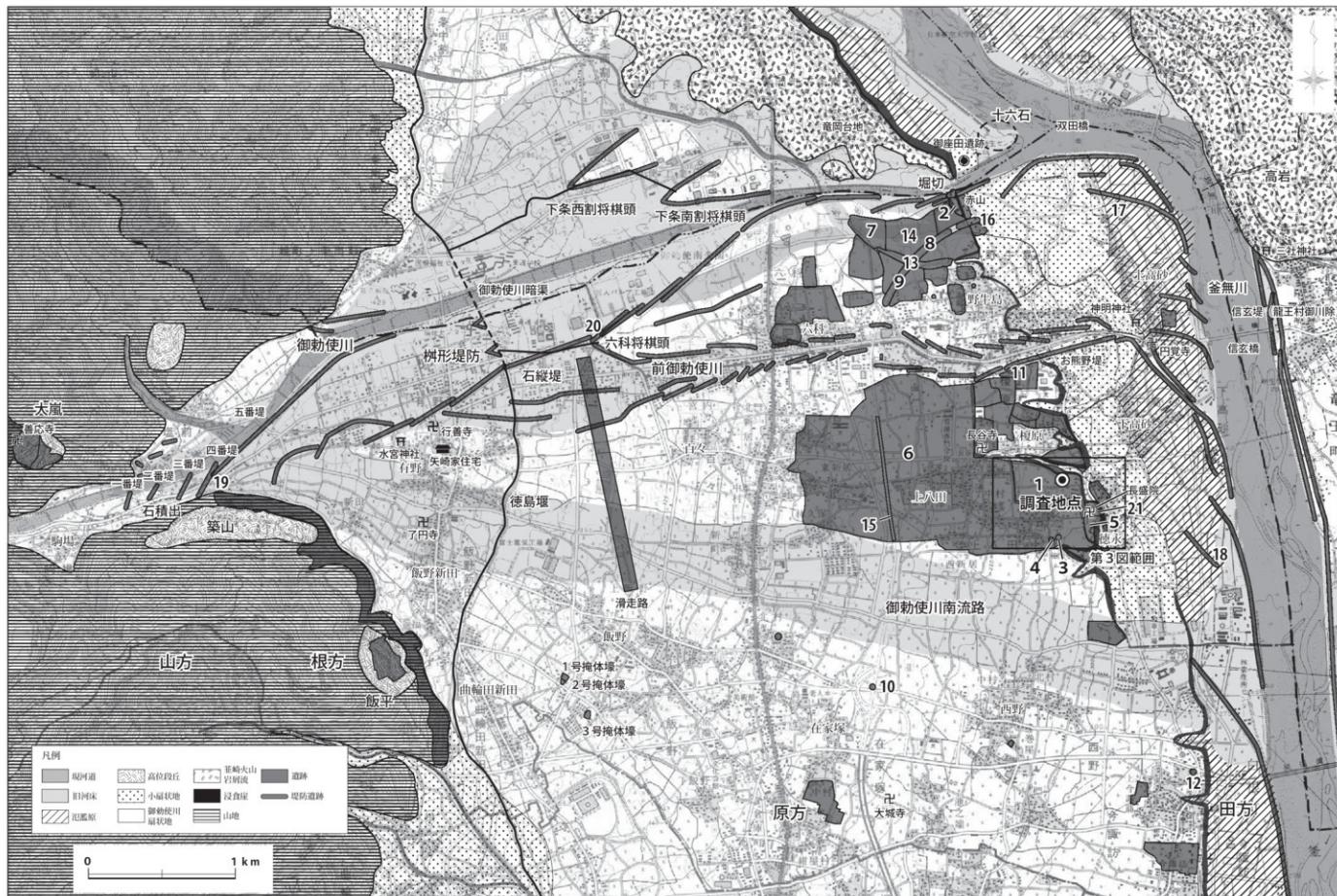
古墳時代後期では、徳永・御崎遺跡第2地点で竪穴住居址が発見されている。本遺跡から南に約2km地点には後期古墳であるおつき穴古墳が立地しており、調査地点周辺に古墳時代後期の集落が広がっていたと推測される。

奈良・平安時代になると発見される遺構数が急増し、坂ノ上姥神遺跡をはじめ、徳永・御崎遺跡、百々・上八田遺跡で竪穴住居址が検出されている。

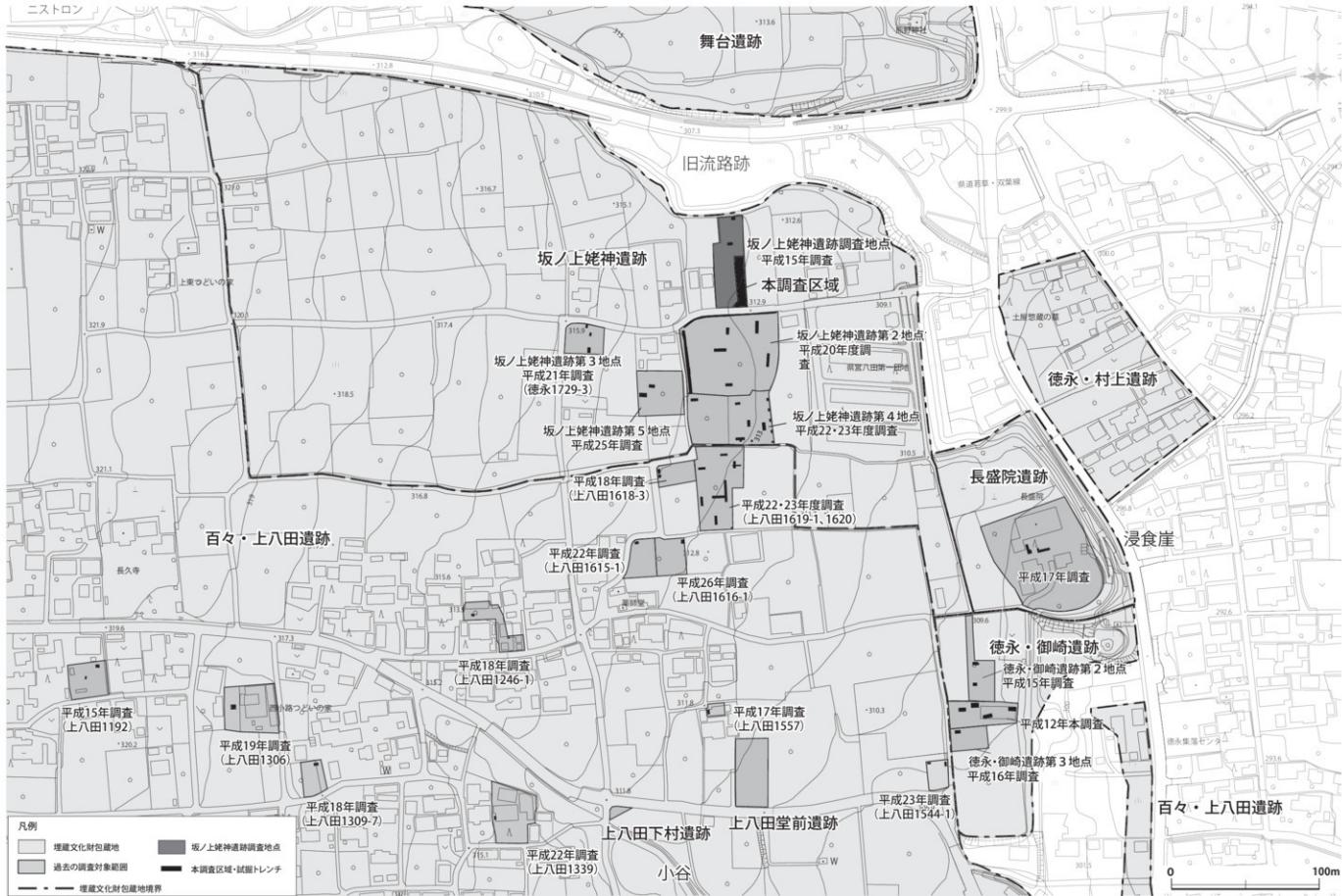
本遺跡南東側に隣接する長盛院遺跡（21）は、縄文時代後期の遺跡であるとともに、中世武田家に仕えていた金丸氏の館跡で、後に武田24将にも数えられた上屋右衛門尉正統や天目山で武田勝頼に従い討ち死にした土屋惣蔵正恒の生家でもある。館跡が立地する場所は東側に浸食崖が走る自然の要害で、本来は北・西・南側に土塁が築かれていたが、現在では虎口を伴う西側の土塁のみが残されている。

註

- (註 1) 煙 大介 1997 「御動使川の流域変遷に関する一観点」『帝京大学文化財研究所報』第 31 号
- (註 2) 保坂康夫 1999 「御動使川流域の古地形と道路立地－中部横断道の試掘調査の成果から－」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2002 「御動使川の流域変遷にかかる最近の考古学的知見」『甲斐路』第 100 号
- (註 3) 今福利忠他 2004 「百々道路 3・5」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 213 集 山梨県教育委員会他
- (註 4) 白根町教育委員会 1985 「白根町の文化財案内」
- (註 5) 白根町埋蔵文化財包装地カード
- (註 6) 八田村教育委員会 2002 「地氷・御崎道路」 八田村文化財調査報告書 第 4 集
- (註 7) 南アルプス市教育委員会他 2005 「平成 15・16 年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 10 集
- (註 8) 上八田町前道路、上八田下村道路、百々道路は江戸初期時代に発掘調査が行なわれた道路である。平成 15 年 6 町村合併後、南アルプス市で実施した道路分布調査の結果、3 道路を含めて周辺地域を「百々・上八田道路」としたが、本節では調査地点を示すために旧道路名で表記する。
- (註 9) 山梨県教育委員会他 1997 「大塚道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 137 集
- (註 10) 山梨県教育委員会他 2000 「石橋北尾敷道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 178 集
- (註 11) 山梨県教育委員会他 2001 「立石下道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 189 集
- (註 12) 山梨県教育委員会他 2001 「横幅道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 184 集
- (註 13) 八田村教育委員会他 2001 「櫻原・天神道路」 八田村文化財調査報告書 第 3 集
- (註 14) 同註 7
- (註 15) 八田村教育委員会 2000 「野牛島・大塚道路」 八田村文化財調査報告書 第 2 集 八田村教育委員会  
山梨県教育委員会他 2003 「野牛島・大塚道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 203 集
- (註 16) 南アルプス市教育委員会 2009 「野牛島・西ノ久保道路 1・II・IV 区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 19 集  
同 2009 「野牛島・西ノ久保道路 5・V・VI 区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 20 集
- (註 17) 山梨県教育委員会他 2002 「百々道路 1」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 201 集  
同 2004 「百々道路 2・4」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 212 集  
同 2004 「百々道路 3・5」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 213 集  
同 2005 「百々道路 6」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 231 集
- (註 18) 山梨県教育委員会他 2001 「仲田道路」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 189 集
- (註 19) 山梨県教育委員会他 2001 「志倉下堤跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 190 集
- (註 20) 山梨県教育委員会他 2005 「笠置山堤防跡群(堤防道路 No. 2.3)」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 277 集
- (註 21) 南アルプス市教育委員会 2008 「石積出四番堤」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 16 集
- (註 22) 宮井公雄他 1994 「若狭道路・須記城址」 白根町教育委員会
- 南アルプス市教育委員会 2009 「平成 19 年度埋蔵文化財試掘調査報告書・御動使川堤防跡群」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 22 集
- (註 23) 南アルプス市教育委員会 2006 「平成 17 年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第 11 集



第2図 御勤使川扇状地地形分類図および遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡と調査地点 (1/2,500)

## 第Ⅲ章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

試掘調査は、平成15年7月31日に着手し、道路予定地を中心に任意寸法のトレンチを2箇所（1次調査第1・2トレンチ）設定して調査を行い、地表下約40～60cmで竪穴住居址、溝状遺構、土坑を検出し、8月1日に埋め戻しを行って調査を完了した。試掘調査結果については「南アルプス市埋蔵文化財試掘調査報告書第10集 平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書」に掲載した。

調査成果を基に遺跡の保存協議を行った結果、宅地部分は盛土保存することとし、遺構が検出された道路部分（約162m<sup>2</sup>）について本調査を実施することとした。

発掘調査は、平成15年9月3日に着手し9月30日終了した。

調査時には、調査範囲が狭いためグリッドを設定しなかったが、整理作業の段階で遺構の位置を整理するため、図面上で5m×5mの任意グリッドを設定した。南北には北からアルファベットを付与し、東西には西から番号を付与した（第5図）。

なお、調査時4号竪穴住居址とした遺構は、整理作業の段階でセクションと出土遺物等を精査した結果、5号竪穴住居址と同一遺構と判断されたため、欠番とした。

### 第2節 層序

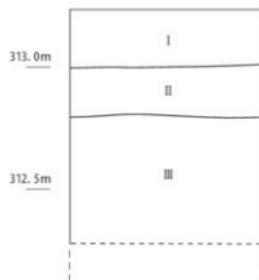
調査区は御動使川扇状地先端部に立地し、周辺の地形は西から東へとゆるやかに傾斜している。調査区全体の堆積状況はほぼ以下の3層である。

#### 土層説明

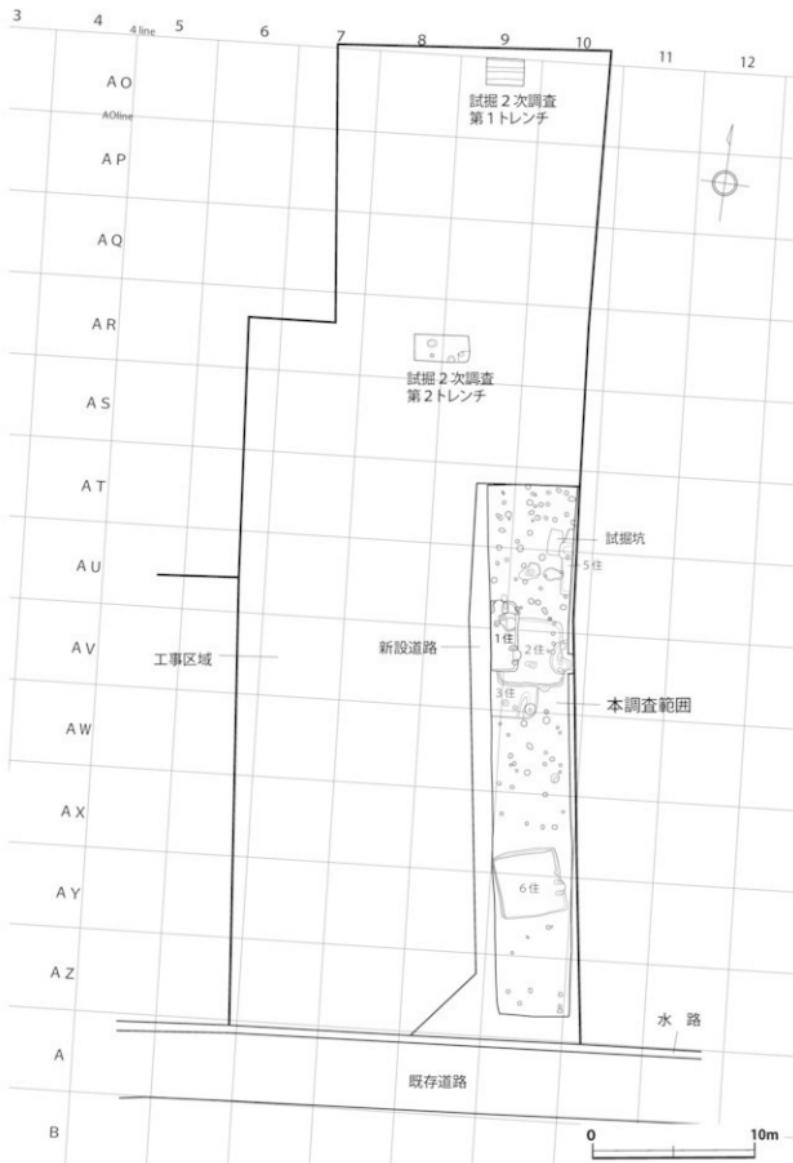
第I層 灰褐色土 表土。耕作土。

第II層 暗褐色土 シルト。遺物包含層。

第III層 明褐色土 シルト。地山。



第4図 基本層序柱状図（1/20）



第5図 坂ノ上姥神遺跡試掘調査および本調査範囲 (1/300)

+

AT

+

AU

+

AV

+

AW

+

AX

+

AY

+

AZ

11

+

+

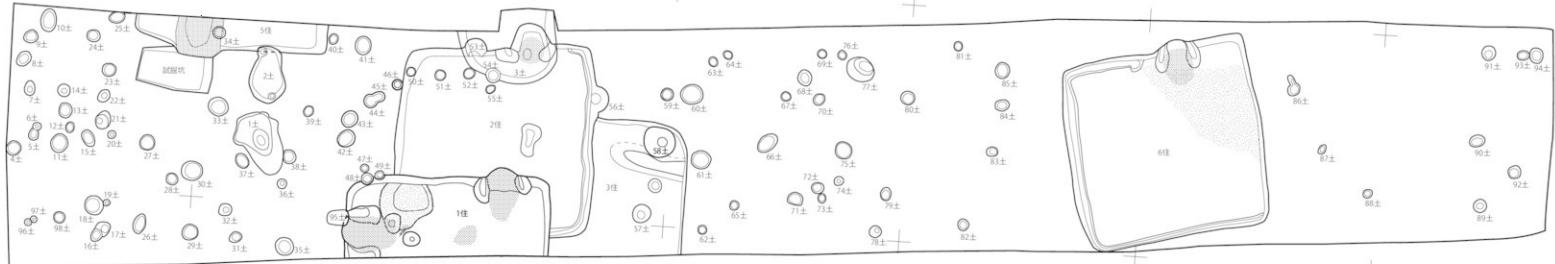
+

+

+

+

10



9

+

+

+

+

+

+

+

8

0 2m

第6図 坂ノ上姥神遺跡全体図 (1/80)

### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 穫穴住居址

1号住居址（第7・8・9・18図、第2・5表、写真図版1・2・3・12・13）

位置 A V 9に位置する。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約65～70cmを数える。

形状 西側が調査区域外に延びるため形状は不明であるが、方形のプランを呈すると推測される。

規模 南北軸は上端で約4.3m、下端で約4.1mを測る。

重複 2・3号住居址を切っている。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。

壁溝 検出されなかった。

カマド 住居址北壁と東壁にひとつずつ造られている。北壁のカマドは東よりに造られ、袖は地山である明褐色粘土で構築されている。カマド内には焼土が堆積し、カマド壁に被熱痕がみられた。東壁のカマドは南よりに造られている。北側の袖には心材として使われた石が残存しており、さらにカマド西側にはカマドの心材に適した石が複数散乱した状況で発見された。ふたつのカマドが同時に使われていたかは不明であるが、遺物の出土状況や焼土の堆積状況から、住居廃絶直前は北カマドの使用頻度が高かったと推測される。

ピット ピット1は112cm×110cm、深さ約6cmを測り不整円形を呈する。北壁カマドの南東に造られたいわゆる「貯蔵穴」と呼ばれるピットで、覆土には焼土および炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積していた。カマドからの流れ込みと考えられる。ピット2は38cm×30cm、深さ約10.5cmを測り不整円形を呈する。掘り込みはないが、東カマド西北に52cm×38cm、梢円形を呈する炉状の焼土の堆積が検出された。

遺物 上層から下層まで多数の土器片が出土した。床面上では北壁カマドの周辺に遺物が多く分布している。1～11は土師器の壺で、10と11内黒土器である。12、13は須恵器の壺、14は土師器の皿、15～17は土師器の甕、18は須恵器の甕である。

時期 土師器壺や甕片から宮ノ前編年Ⅷ期、9世紀末から10世紀初頭と推測される。

2号住居址（第10・11・12・19・20図、第2・3・5表、写真図版4・5・13・14・15）

位置 A V 10に位置する。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約43～50cmを数える。

形状 方形のプランを呈する。

規模 南北軸は上端で約4.2m、下端で約3.8m、東西軸は上端で約4.1m、下端で約3.7mを測る。

重複 3号住居址を切っており、1号住居址に切られている。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。

壁溝 西壁と南壁、東壁の一部で検出した。幅約20～25cm、深さ約4～8cmを測る。

カマド 東壁やや南よりに地山を削り貫いて造られている。袖には心材として石が使用されており、それを一部覆うように明褐色土粘土が利用されていた。カマド内には焼土が堆積し、カマド壁に被熱痕がみられた。

ピット ピット1は70cm×43cm、深さ約11.5cmを測り不整梢円形を呈する。

遺物 上層から下層まで多数の土器片が出土した。カマドの周辺に遺物が多く分布している。1は

土師器の壺、2～9は須恵器の壺で、須恵器の壺の割合が高い。11～12は須恵器の長頸壺、15は土師器のロクロ甕、18は灰釉陶器である。この住居の特徴として、床面上から砾石が1点、円形から梢円形を呈する石器が4点出土した。用途は不明であるが、形状から何かを磨るために石器と推測される。

時期 土師器および須恵器壺や甕片から宮ノ前編年IV期、8世紀末と推測される。

3号住居址（第10・11・21図、第2・5表、写真図版4・5・16）

位置 A V 10 に位置する。

遺存 遺存状態は、確認面から床面まで約 20cm を数える。

形状 西側部分が調査区外に延び、1号住居址、2号住居址に切られているため形状は不明であるが、方形のプランを呈すると推測される。

規模 南北軸は上端で約 2.8 m、下端で約 2.7 m を測る。

重複 1、2号住居址および 58 号土坑に切られている。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。住居東南側で幅約 45～56cm の浅い溝が床面に掘り込まれている。

壁溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

遺物 出土した遺物のほとんどは土器の小片であり、出土量も少ない。

時期 土師器壺や甕片から宮ノ前編年II期、8世紀中頃と推測される。

4号住居址（欠番）

5号住居址（第13・21図、第2・5表、写真図版6・16）

位置 AU10 に位置する。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約 50～55cm を数える。

形状 東側部分が調査区外に延びるため形状は不明であるが、方形のプランを呈すると推測される。

規模 南北軸は上端で約 4.05 m、下端で約 3.75 m を数える。

重複 2号土坑に切られている。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。

壁溝 検出されなかった。

カマド 西壁に造られている。カマド内には焼土が堆積していたが、天井部や袖は検出されなかった。

遺物 カマドから少量の土器片が出土した。1は土師器の壺、2～4は須恵器壺、5は土師器のロクロ甕である。

時期 土師器および須恵器壺や甕片から宮ノ前編年IV期、8世紀末と推測される。

6号住居址（第14・15・16・22・23図、第2・5表、写真図版7・8・16～19）

位置 AY10 から AX10 に位置する。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約 35～48cm を数える。

形状 方形のプランを呈する。

規模 南北軸は上端で約 4.1 m、下端で約 3.75 m、東西軸は上端で約 4.05m、下端で約 3.75m を測る。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。住居址ほぼ全体で硬化面を検出した。

壁溝 北壁と東壁の一部で検出した。幅約 15～30cm、深さ約 4～8 cm を測る。

カマド 東壁に造られ、袖には明褐色土粘土が用いられている。カマド内には焼土が堆積し、カマド

壁に被熱痕がみられた。

**ピット** ピット1は38cm×32cm、深さ約12cmを測り楕円形を呈する。東壁カマドの南東に造られたいわゆる「貯蔵穴」と呼ばれるピットで、覆土には焼土および炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積していた。カマドからの流れ込みと考えられる。ピット2は56cm×40cm、深さ約12cmを測り不整楕円形を呈する。ピット3は43cm×32cm、深さ約8cmを測り楕円形を呈する。ピット4は22cm×22cm、深さ約8cmを測り不整円形を呈する。ピット5は径25cm、深さ約13cmを測り円形を呈する。ピット6は37cm×26cm、深さ約4cmを測り楕円形を呈する。ピット7は32cm×23cm、深さ約7cmを測り楕円形を呈する。

**遺物** 上層から下層まで多数の土器片が出土した。床面上ではカマドの周辺に遺物が集中して分布している。1～16は土師器の环で、16は内黒土器である。須恵器の环や甕も出土しているが、遺物構成は土師器主体である。覆土上層から刀子が1点出土した。

**時期** 土師器环や甕片から宮ノ前編年VI期、9世紀前と推測される。

## 2. 土坑（第6・17・23図、第1・2表、写真図版9・10）

**1号土坑**（第17・23図、第1・2表、写真図版9・19）

**位置** AU10に位置する。

**形状・規模** 不整楕円形を呈する。確認面から床面まで約26cmを測る。

**遺物** 土師器の甕、須恵器の环等が出土した。

**2号土坑**（第17図、第1表、写真図版9）

**位置** AU10に位置する。

**形状・規模** 楕円形を呈する。確認面から床面まで約18cmを測る。

**重複** 5号住居址を切っている。

**遺物** 土師器の环、甕、が出土した。

**時期** 土師器环や甕片から宮ノ前編年VII～IX期、9世紀終～10世紀中頃と推測される。

**3号土坑**（第17・23図、第1・2表、写真図版9・19）

**位置** AV10に位置する。

**形状・規模** 調査区外へ伸びるため正確な形状は不明であるが、楕円形を呈すると推測される。確認面から床面まで約28cmを測る。

**重複** 2号住居址を切っている。

**遺物** 土師器の环、甕、須恵器の甕等が出土した。

**時期** 土師器环や甕片から宮ノ前編年VII～IX期、9世紀終～10世紀中頃と推測される。

**66号土坑**（第17図、第1表、写真図版10）

**位置** AW10に位置する。

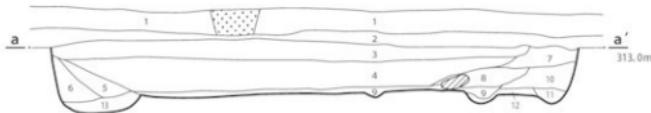
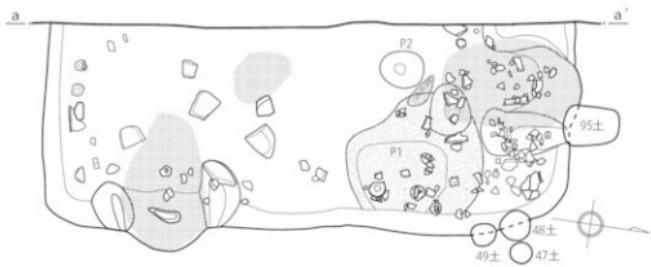
**形状・規模** 楕円形を呈する。確認面から床面まで約16cmを測る。

**77号土坑**（第17図、第1表、写真図版10）

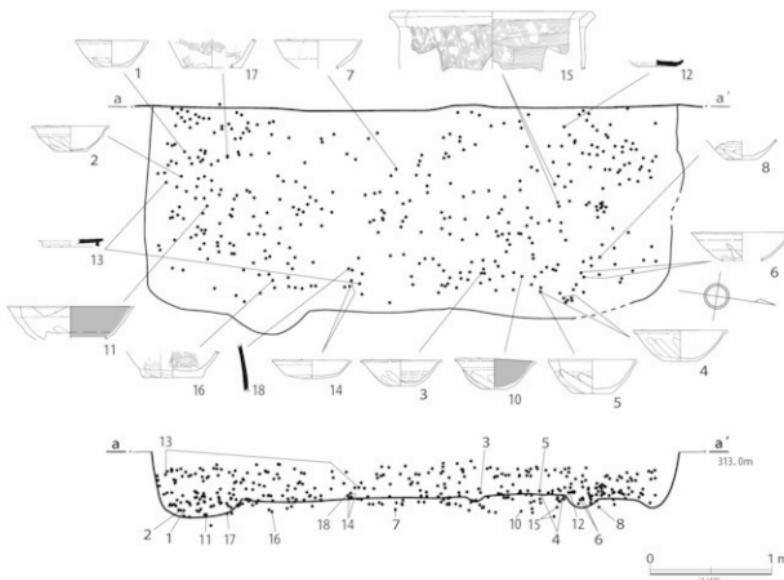
**位置** AW10に位置する。

**形状・規模** 楕円形を呈する。確認面から床面まで約38cmを測る。

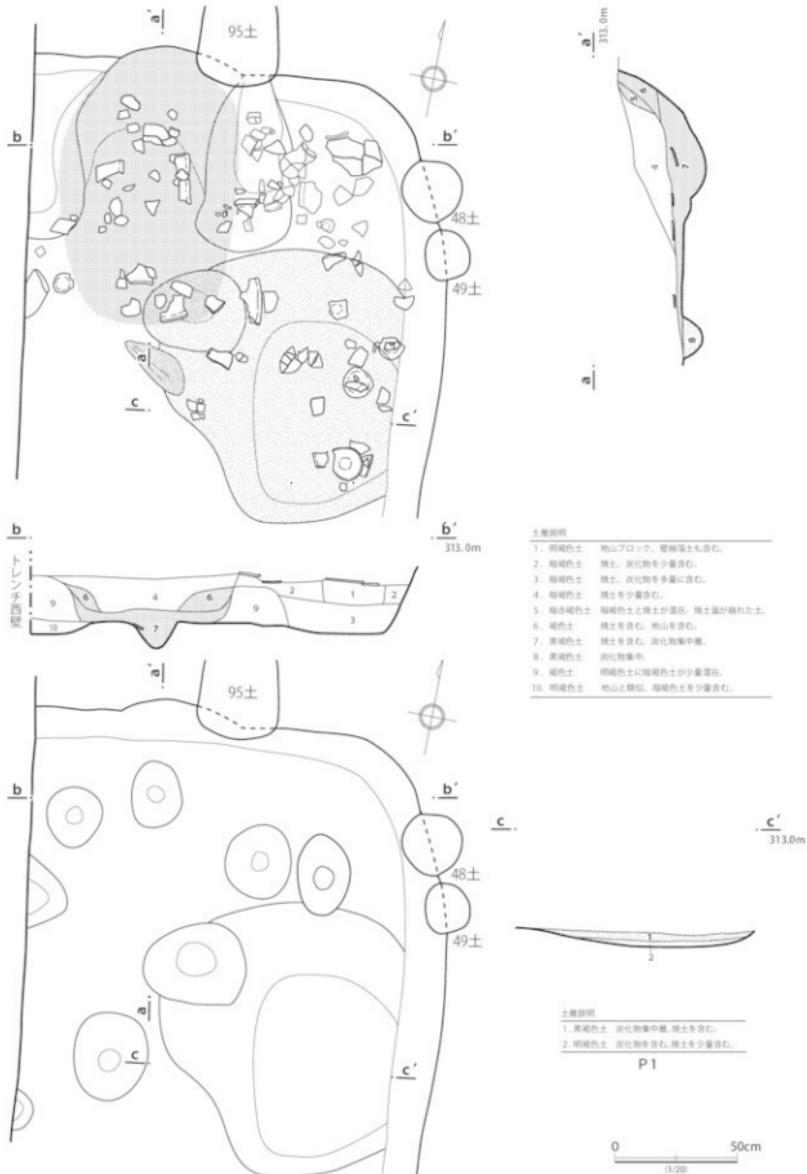
その他の土坑については土坑計測表を参照していただきたい。



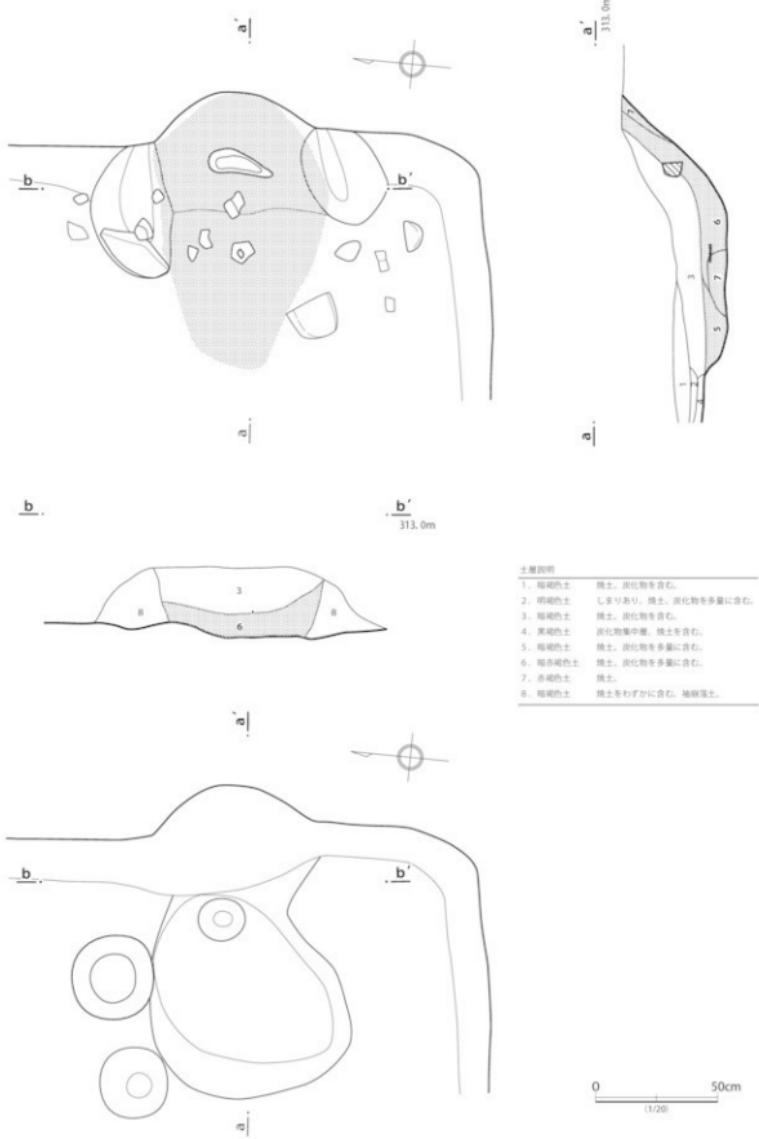
- 土層説明
1. 褐色土 稲作土。
  2. 褐灰色土 黒まりあり、粘性ややあり、炭化物を少量含む。
  3. 褐灰色土 稲土を少量含む。
  4. 褐褐色土 稲土粒、炭化物を含む。
  5. 褐褐色土 稲土、炭化物を多量に含む。
  6. 褐褐色土 稲土粒、炭化物をやや多量に含む。
  7. 褐褐色土 炭化物を少量含む。
  8. 黒褐色土、褐褐色土を含む。
  9. 黑褐色土 炭化物を中量、埴土を含む。
  10. 褐色土 黑褐色土に褐褐色土が少量混在。
  11. 黑褐色土 黑褐色土を少量含む。
  12. 黑褐色土 地山と同様、黑褐色土を少量含む。
  13. 黑褐色土 稲、埴土炭化物を多量に含む、黒褐色土を少量含む。



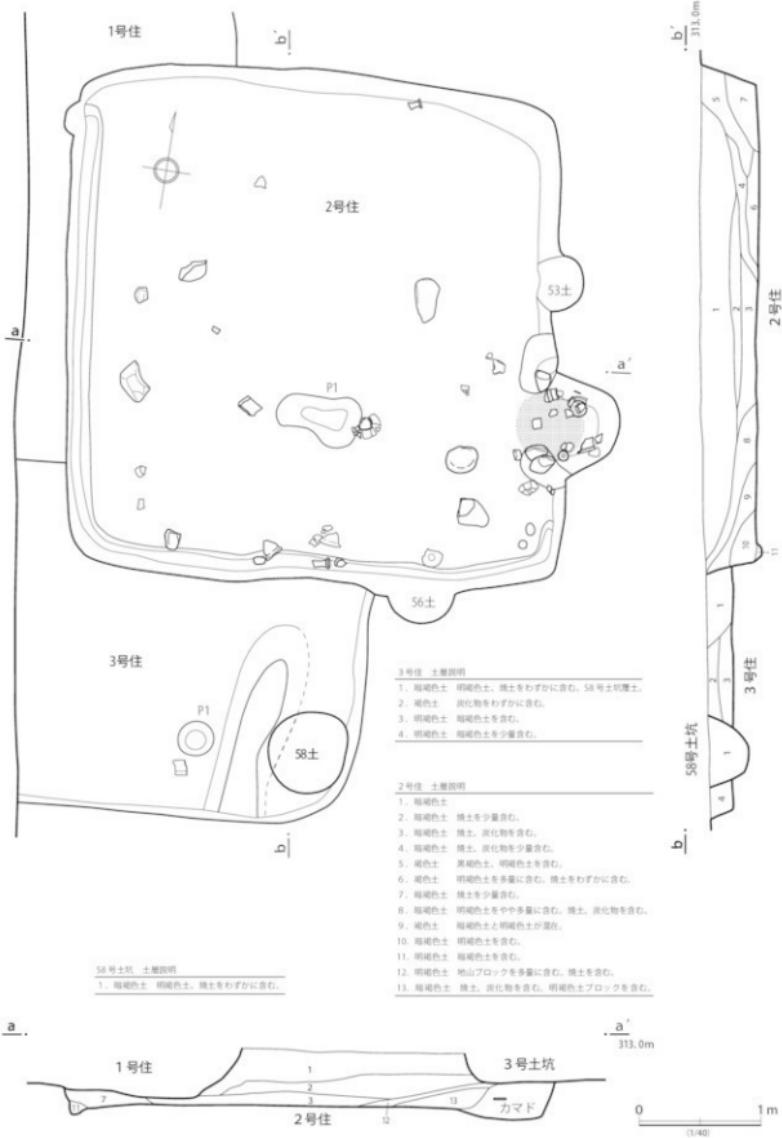
第7図 1号住居址平・断面図および遺物分布図(1/40)



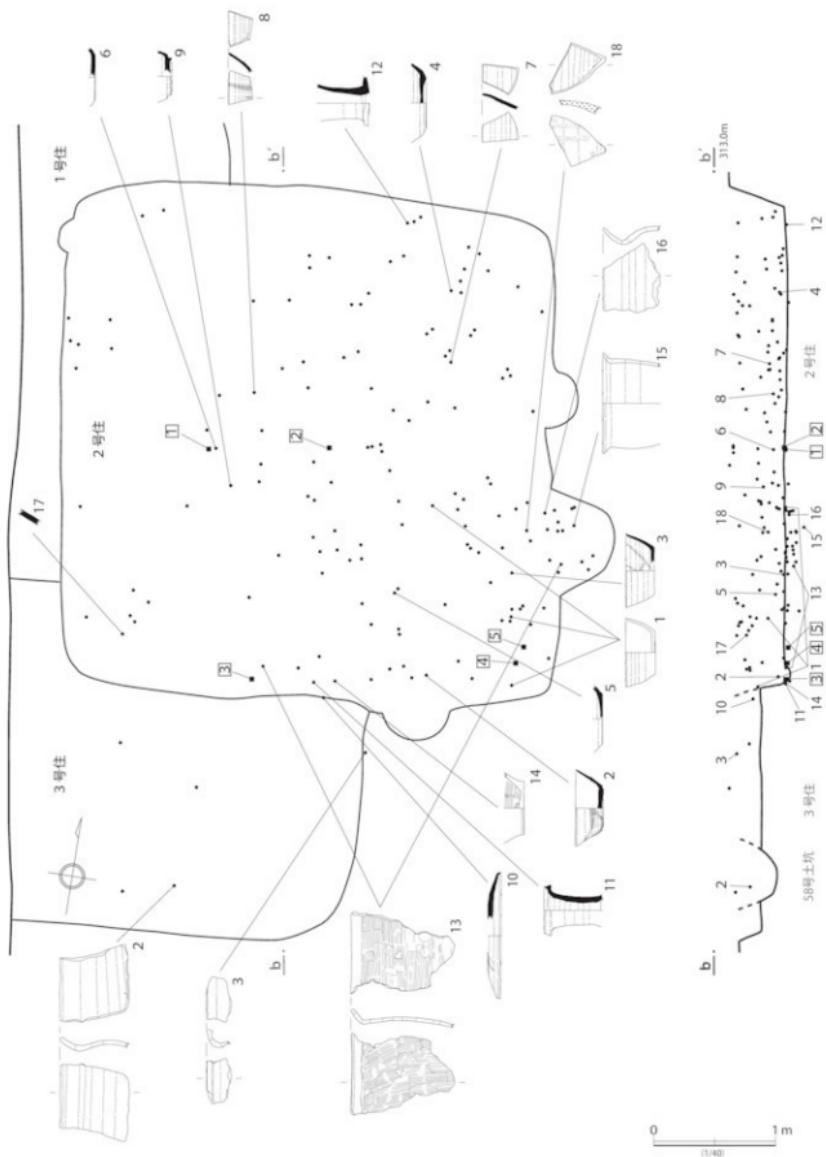
第8図 1号住居址北カマド平・断面、掘方図 (1/20)



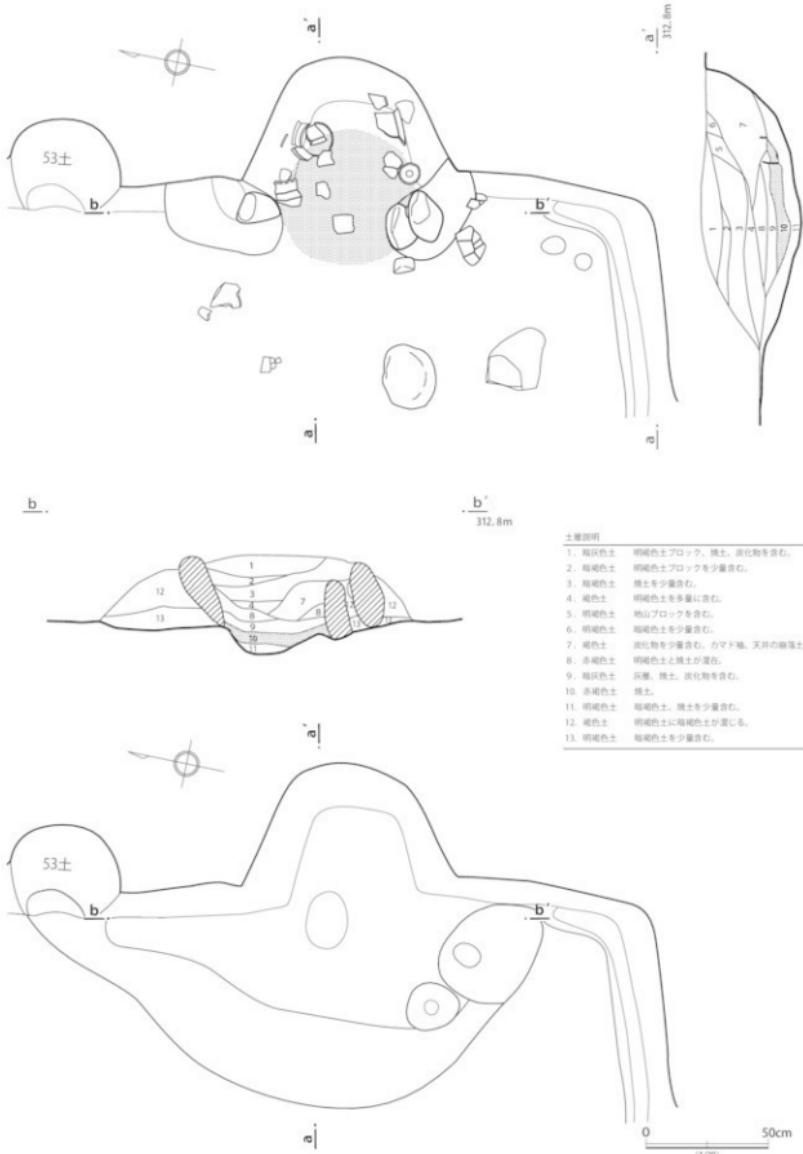
第9図 1号住居址東カマド平・断面、掘方図 (1/20)



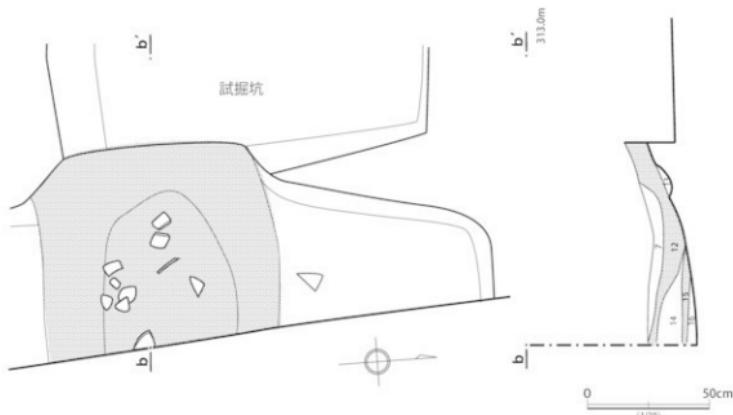
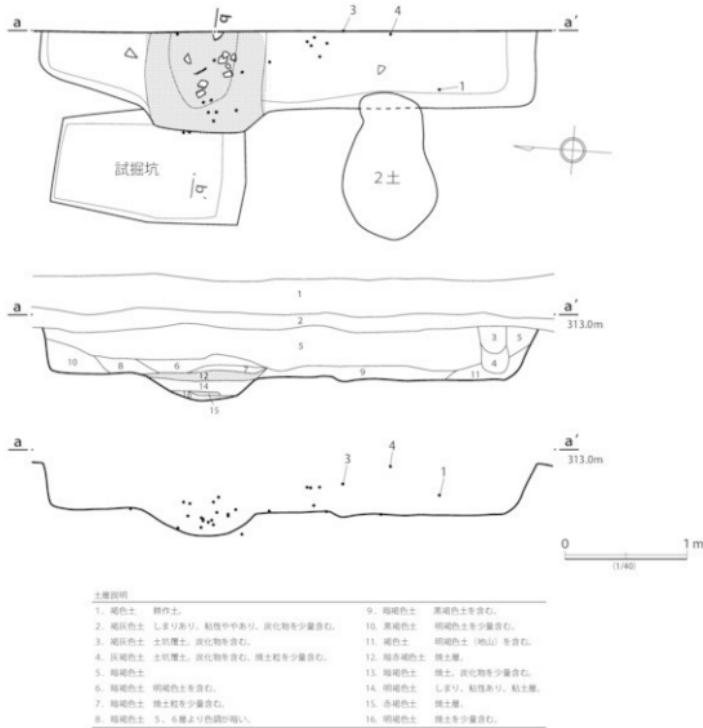
第10図 2・3号住居址平・断面図 (1/40)



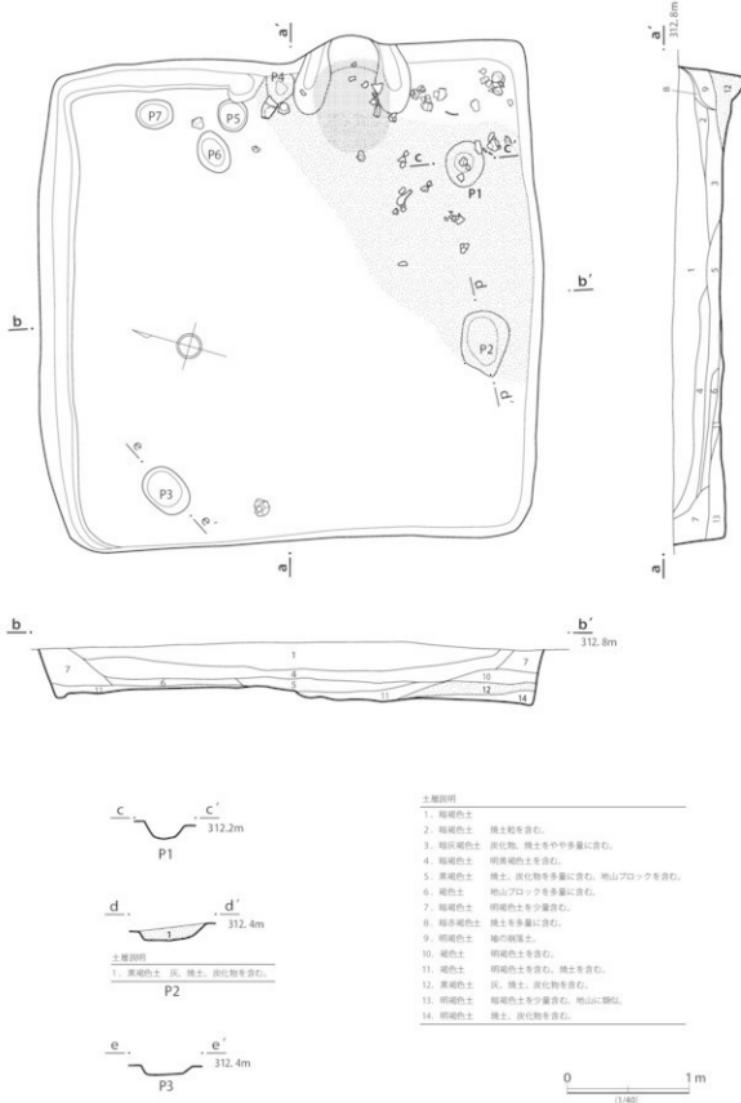
第 11 図 2・3号住居址遺物分布図 (1/40)



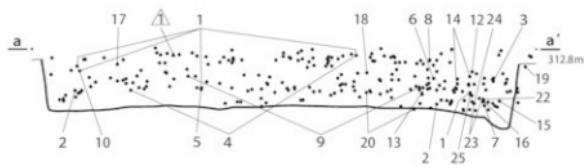
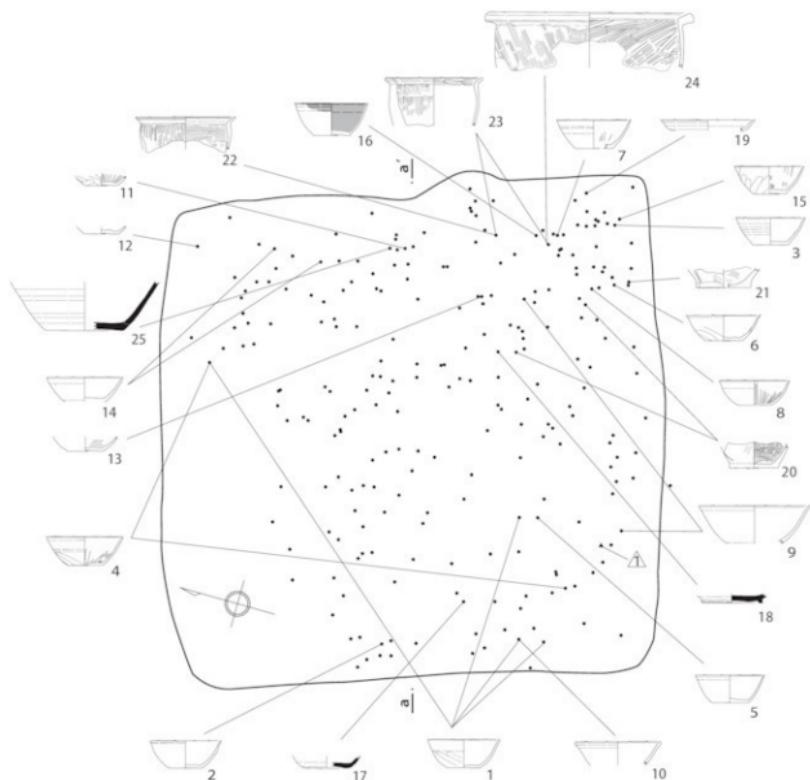
第12図 2号住居址カマド平・断面、掘方図 (1/20)



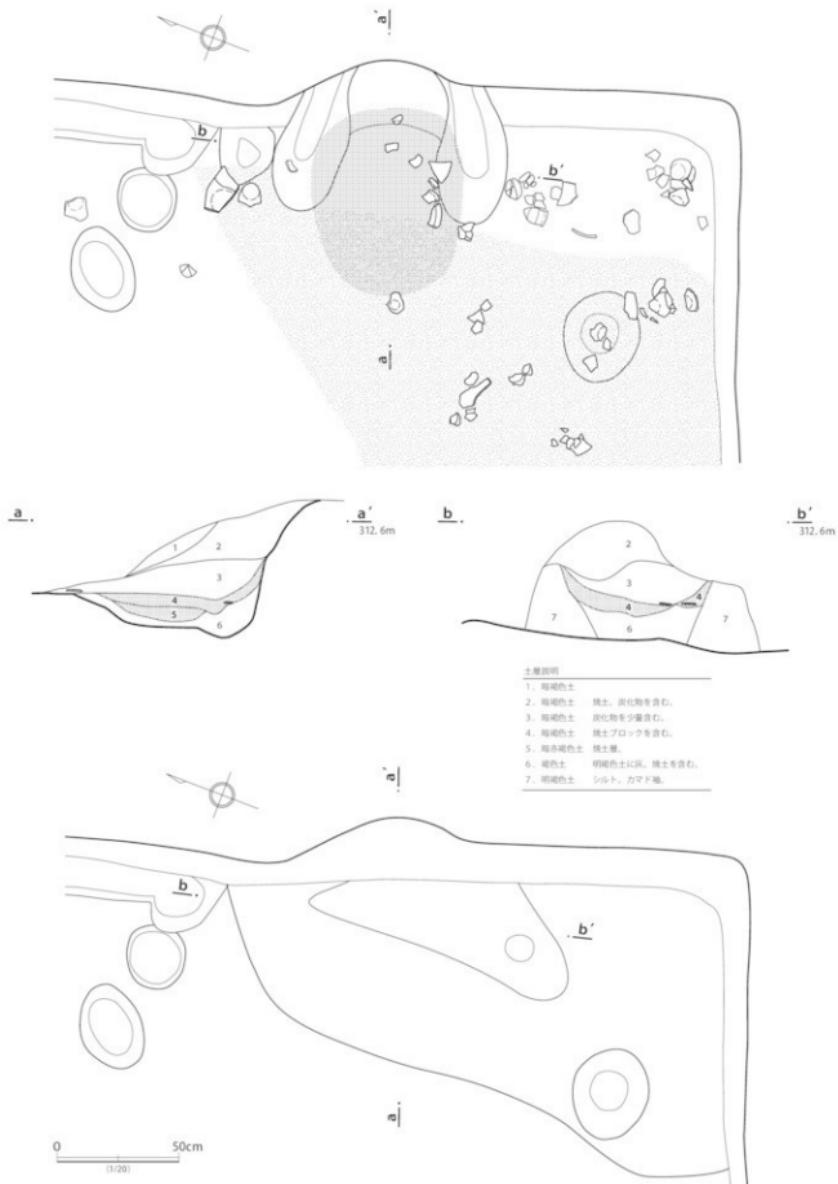
第13図 5号住居址平・断面図および遺物分布図 (1/40)、カマド平・断面図 (1/20)



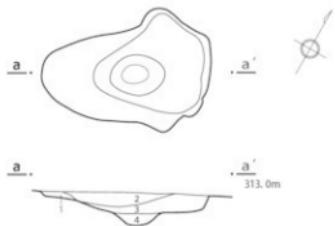
第14図 6号住居址平・断面・エレベーション図 (1/40)



第15図 6号住居址遺物分布図 (1/40)

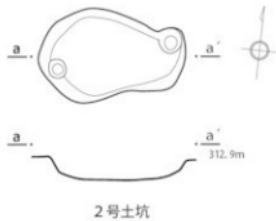


第16図 6号住居址カマド平・断面、掘方図 (1/20)

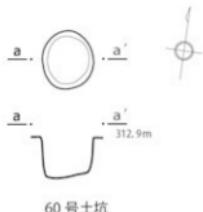


土層図明  
1. 明褐色土 暗褐色土を少量含む。  
2. 明褐色土 硅土、炭化物を多量に含む。  
3. 明褐色土 硅土、炭化物をわずかに含む。  
4. 明褐色土 3層より色濃が細い。

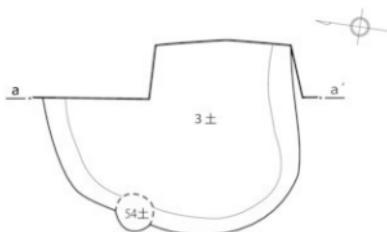
1号土坑



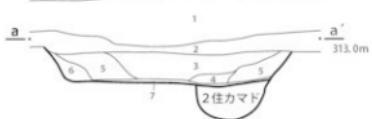
2号土坑



60号土坑

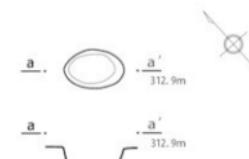


66号土坑

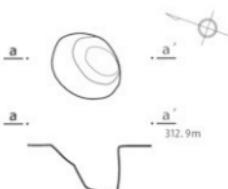


土層図明  
1. 明褐色土 黄土。  
2. 明褐色土 シルト。  
3. 明褐色土 シルト、褐色土を含む。  
4. 明褐色土 硅土を含む、地山ブロックを含む。  
5. 明褐色土 シルト。  
6. 黒褐色土 硅土を少量含む。  
7. 明褐色土 シルト。

3号土坑



66号土坑



77号土坑

0 1 m  
(1/40)

第17図 土坑平・断面・エレベーション図 (1/40)

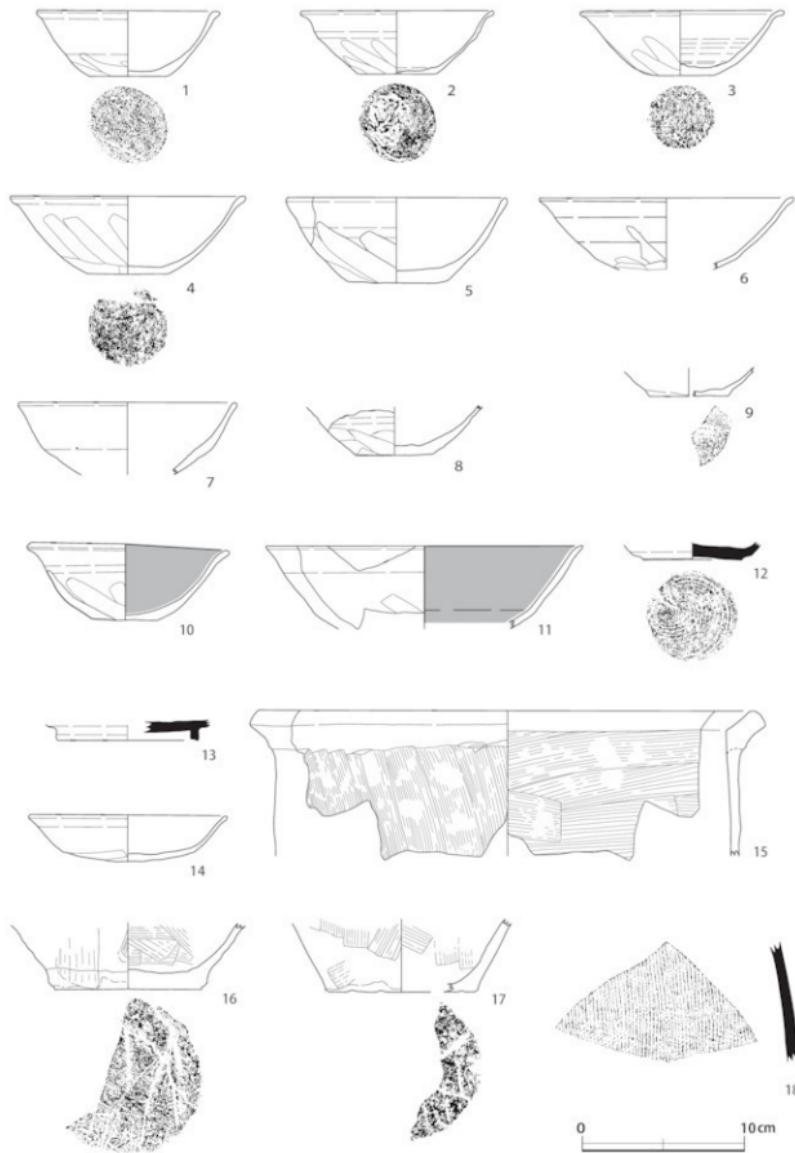
第1表 土坑計測表（第6・17図）

土坑番号	形	径(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕円形		140	66	27.3	土師器甕、須恵器环
2	楕円形		120	78	18.8	土師器环、甕
3	[楕円形]		208	[112]	20.5	土師器环、甕、須恵器甕
4	円形	32			41.8	
5	楕円形		23	19	25.4	土師器环
6	円形	17			9.8	
7	楕円形		32	22	28	土師器甕
8	楕円形		35	27	25.1	土師器甕
9	楕円形		32	27	26.1	
10	楕円形		50	33	10.2	
11	楕円形		40	37	34.7	
12	楕円形		23	17	15.7	
13	楕円形		32	29	18.3	
14	円形	27			18.8	
15	楕円形		40	24	15.3	
16	楕円形		27	23	14.4	
17	[楕円形]		[30]	22	35.8	土師器甕
18	円形	41			24.5	
19	円形	14			10.7	
20	円形	17			5.8	
21	楕円形		40	31	27.7	
22	楕円形		30	23	25.6	土師器甕
23	円形	29			23.4	
24	楕円形		28	25	8.1	
25	[楕円形]		35	[24]	9.4	
26	楕円形		43	26	13.2	
27	円形	33			23.7	
28	円形	26			30.4	土師器甕
29	円形	35			24.4	
30	楕円形		45	41	30.2	
31	楕円形		26	21	14.5	
32	楕円形		29	26	13.4	
33	楕円形		44	39	44.9	
34	円形	26			9.2	
35	楕円形		40	36	33.4	
36	円形	21			16.8	
37	楕円形		35	26	44.8	
38	楕円形		30	27	31.6	須恵器甕
39	楕円形		24	21	17.1	
40	楕円形		24	20	36.3	
41	楕円形		40	34	43.3	
42	楕円形		39	34	33.5	土師器环
43	円形	34			12.5	
44	[楕円形]		29	[21]	23	
45	[楕円形]		[25]	21	22	
46	円形	23			26	
47	円形	18			13	
48	円形	24			14	
49	円形	21			15	

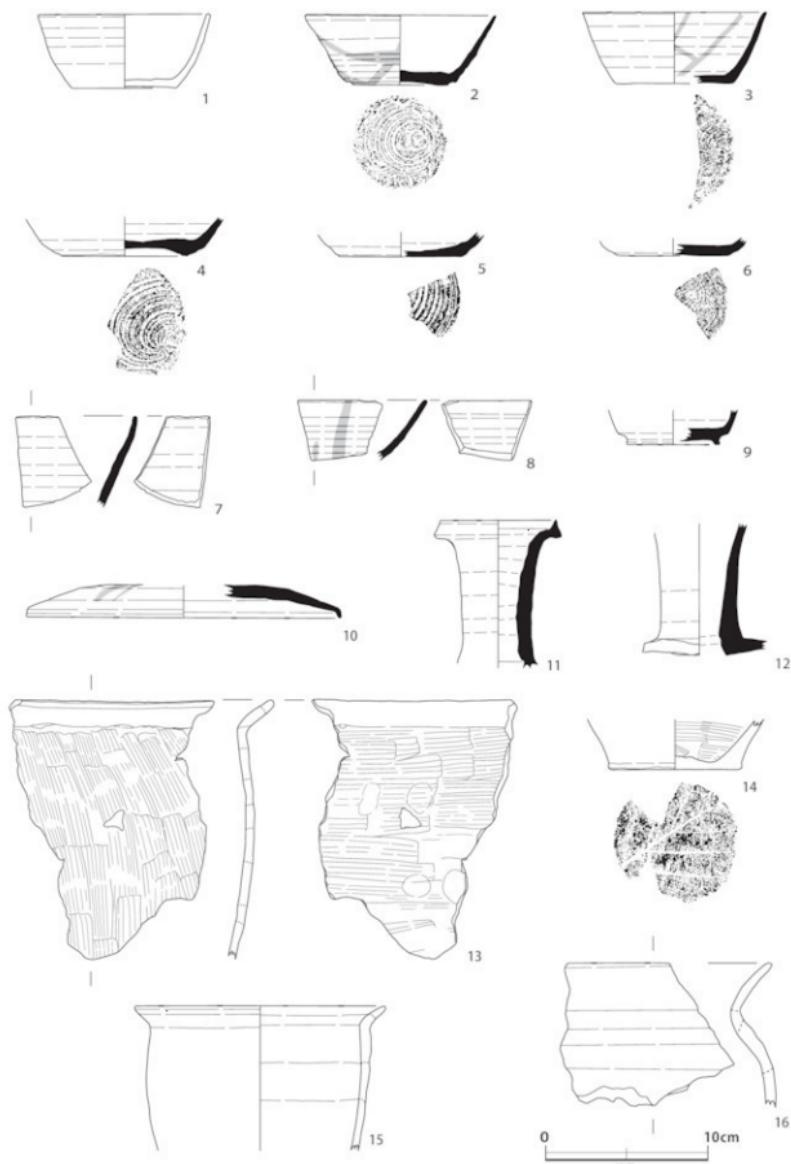
※・・・形の〔 〕は推定形、径・長軸・短軸の〔 〕は現存値

土坑番号	形	径(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
50	円形	20			21	
51	円形	23			34	
52	円形	26			34.4	土師器坏
53	円形	48			33.5	
54	円形	32			45	
55	楕円形		22	18	47.8	
56	[円形]	55			45	
57	円形	38			17.5	
58	円形	66			18.5	
59	円形	25			15	
60	楕円形		49	42	32	土師器遺
61	楕円形		42	38	37.5	
62	円形	18			26.5	土師器坏
63	円形	21			21	
64	円形	21			20	
65	円形	20			21.2	
66	楕円形		49	32	17.5	
67	円形	21			26.5	
68	楕円形		35	30	22.5	
69	円形	20			15.5	
70	楕円形		27	23	21.5	
71	楕円形		32	27	13.5	
72	楕円形		27	24	41	
73	円形	18			20	
74	円形	20			10	
75	円形	35			17.6	
76	円形	20			8.5	
77	楕円形		62	52	40	
78	円形	25			19.5	
79	楕円形		29	23	14.5	
80	円形	30			25	
81	円形	19			16	
82	円形	25			17.5	
83	楕円形		24	19	16.5	
84	楕円形		31	24	22	
85	楕円形		35	30	19.4	
86	不整形		45	13	7.5	
87	楕円形		23	19	7.5	
88	円形	19			14	
89	円形	29			18.5	
90	楕円形		34	25	15.5	
91	円形	30			17.5	
92	円形	28			17	
93	楕円形		26	21	7.6	
94	楕円形		32	28	17.3	
95	楕円形		46	32	32.5	
96	円形	15			11.3	
97	円形	14			5.4	
98	円形	24			8.9	

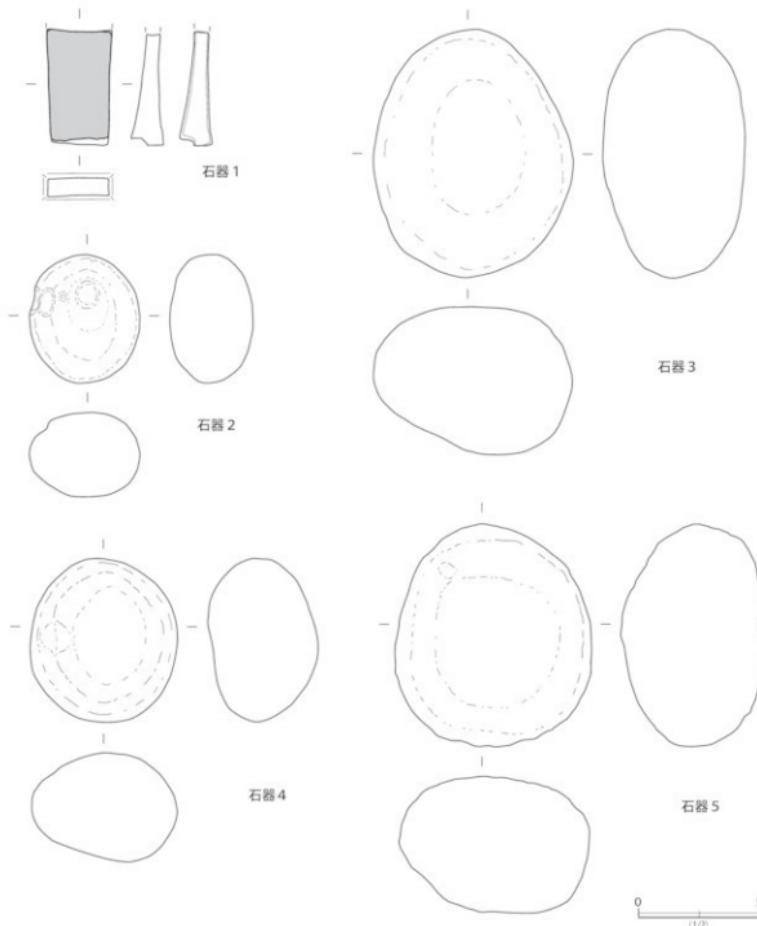
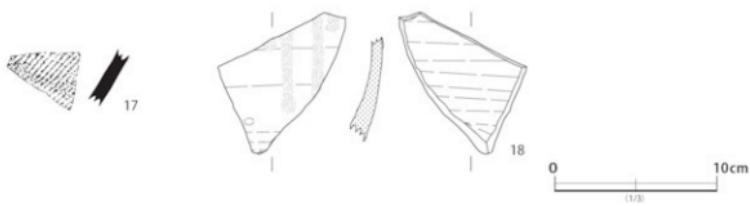
※・・・形の〔 〕は推定形、径・長軸・短軸の〔 〕は現存値



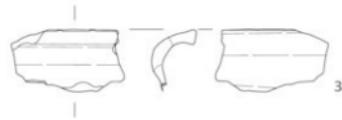
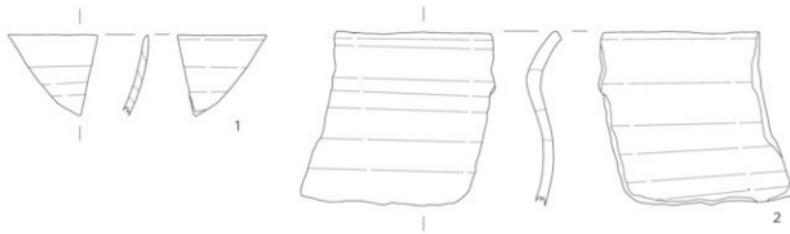
第18図 1号住居址出土遺物 (1/3)



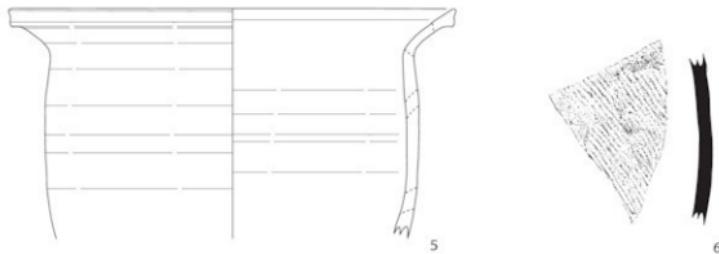
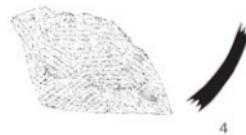
第19図 2号住居址出土遺物 (1/3)



第 20 図 2 号住居址出土遺物 (1/3・1/2)



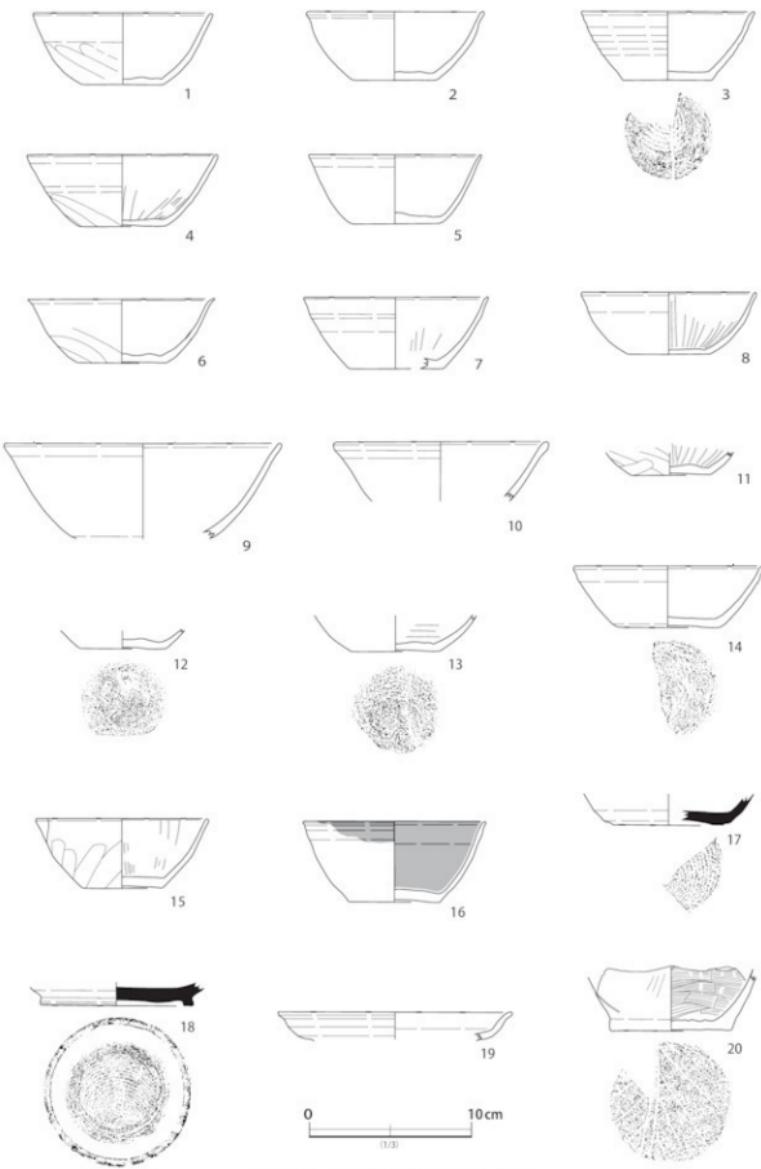
3号住居址



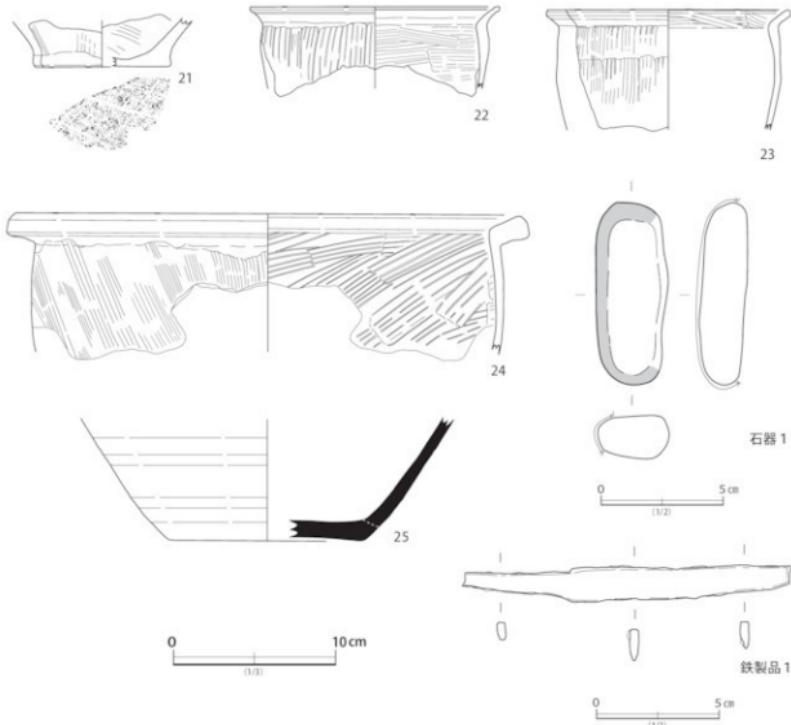
5号住居址



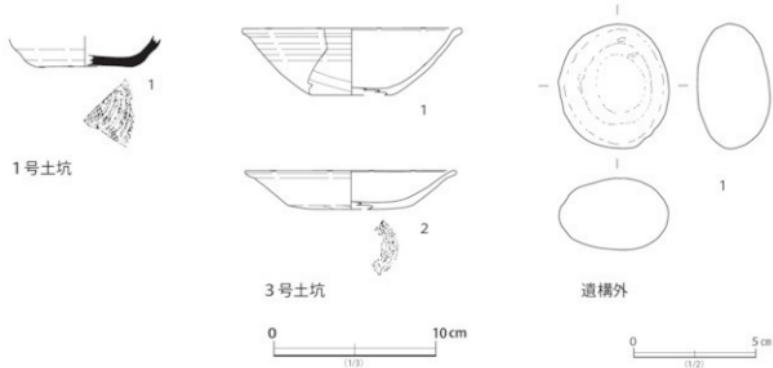
第21図 3・5号住居址出土遺物 (1/3)



第22図 6号住居址出土遺物 (1/3)



6号住居址



第23図 6号住居址、1・3号土坑、遺構外出土遺物 (1/3・1/2)



遺構名	番号	種別	基準	法量 (cm)			残存率 (%)	製作方法			地土	含物物	色調	外/内	焼成	注記番号	備考
				口径	底径	高さ		内面	外面	底部							
6号住	15	土師器	井	(31.0)	4.8	4.3	62	ハラカズワ	陶文	追跡(61.6)	砂	褐色	褐色	平底	10.1住 3.6	反転式窯	
6号住	16	土師器	井	(31.0)	5.6	4.95	60	追跡(ハラカズ)	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1住 3.6	内面に留められた褐色の砂、外側に褐色の砂、反転式窯	
6号住	17	土師器	井	—	7	—	底部 破	追跡(61.6)	砂	白砂粒子	灰白	中砂粒	褐色	平底	10.1住 4.7	反転式窯	
6号住	18	追跡器	井	—	9.3	—	追跡破形	追跡(61.6)	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1住 3.6	反転式窯	
6号住	19	土師器	井	22	14.4	—	口径破形	追跡(61.6)	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1住 3.6	反転式窯	
6号住	20	土師器	井	—	7.4	—	追跡(61.6)	ハラカズ	ハラカズ	追跡木葉模	砂	白色粒子、褐色粒子、青色粒子	褐色	中砂粒	10.1住 1.90	追跡(61.6)付	
6号住	21	土師器	井	—	8.2	—	底部 破	追跡木葉模	砂	白色粒子、褐色粒子、青色粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1住 2.16	反転式窯	
6号住	22	土師器	井	15.4	—	—	口径破形	ハラカズ	ハラカズ	砂	白色粒子、褐色粒子、青色粒子	褐色	褐色	平底	10.1住 1.75・方	反転式窯	
6号住	23	土師器	井	14.8	—	—	口径破形	ハラカズ	ハラカズ	砂	白色粒子、褐色粒子、青色粒子	褐色	褐色	平底	10.1住 1.75・2.27	反転式窯	
6号住	24	土師器	井	31	—	—	口径破形	ハラカズ	ハラカズ	砂	白色粒子、褐色粒子、明褐色	褐色	褐色	中砂粒	10.1住 2.25	反転式窯	
6号住	25	追跡器	井	—	12	—	底部 破	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	褐色	平底	10.1住 1.82	反転式窯	
6号土切	1	追跡器	井	—	—	5.8	追跡破形	追跡(61.6)	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1土 4	追跡(61.6)付、反転式窯	
1号土切	1	土師器	井	(11.6)	4.8	4.1	25	ハラカズワ	砂	白砂粒子	褐色	褐色	褐色	平底	10.1土 2.0	内面に留められた褐色、反転式窯	
1号土切	2	土師器	目	(32.9)	4.2	2.35	25	ハラカズワ	砂	白色粒子、褐色粒子、明褐色	褐色	褐色	褐色	平底	10.1土 2.7	反転式窯	

第3表 石器観察表（第20・23図）

遺構名	番号	種別	法量 (cm)			重さ (g)	注記番号	備考	
			最大径	幅	厚さ				
2号住	1	—	—	4.7	2.8	1.2	21	50.2住 3	磨石
2号住	2	—	—	5.25	4.85	3.4	105	50.2住 2	磨石
2号住	3	—	10.2	5.15	6.0	483	50.2住 4	磨石	
2号住	4	—	6.7	5.9	4.4	245	50.2住 6	磨石	
2号住	5	—	9.1	8.0	5.5	482	50.2住 7	丸石	
6号住	1	—	7.1	3.0	1.8	76	50.6住 5-2	磨石	
遺構外	1	—	—	5.05	4.5	2.9	90	50.6外 1	磨石

第4表 鉄製品観察表（第23図）

出土地点	番号	種類	法量 (cm)			重さ (g)	取上げNo	保存処理番号
			長さ	幅	厚さ			
6号住	1	刀子	11.12	14.3	7.3	165	50.6住 1	30903

## 第IV章 理科学的分析

### 第1節 坂ノ上姥神遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

坂ノ上姥神遺跡（山梨県南アルプス市徳永地内）は、御勅使川が形成した扇状地北東の扇端付近に立地する。本遺跡は、今回の発掘調査地点より奈良・平安時代の竪穴住居址が確認されているほか、隣接する地点の発掘調査においても古代の竪穴住居址が検出されている。

本報告では、古代の集落における栽培植物を含む植物利用の検討を目的として、竪穴住居址のカマド埋積物より得られた炭化物を対象に種実遺体分析を実施した。

#### 1. 試料

試料は、竪穴住居址（1号住、2号住、5号住、6号住）の各カマド埋積物の水洗選別により回収された炭化物である（表1）。炭化物試料は、それぞれフィルムケースで保管されており、各試料の観察では炭化種実のほか、炭化材や骨片などが確認された。本分析では、上記した目的を踏まえ、炭化物試料中の炭化種実の抽出と同定を行った。

#### 2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて炭化種実を拾い出す。炭化種実の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、検出された分類群を容器に入れて保管する。

#### 3. 結果

結果を表1に示す。カマド埋積物の炭化物試料から抽出した種実は、栽培種のイネの胚乳（2個）、オオムギの胚乳（1個）、コムギの胚乳（1個）、アズキ類の種子（1個）、マメ類の種子（3個）に同定された。以下に、同定された各分類群の形態的特徴を記す。

##### ・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。大きさは、残存長3.7mm、幅2.3mm、厚さ1.4mm（2号住；カマドフク土）と、長さ3.9mm、幅2.3mm、厚さ1.6mm（6号住；カマド焼土）。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縱列する。6号住のカマド焼土より出土した胚乳は、焼き膨れている。

##### ・オオムギ (*Hordeum vulgare L.*) イネ科オオムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ5.2mm、残存幅3.0mm、厚さ2.1mmのやや偏平な紡錘状長楕円体で、両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で微細な縦筋がある。

##### ・コムギ (*Triticum aestivum L.*) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ3.4mm、幅2.1mm、厚さ1.5mmの楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な粒状模様が

表1 炭化種実同定結果

遺構/地点		種別	分類群	部位	状態	数量(個)	備考:種実以外の種類
1号住	カマドフク土	炭化物	マメ類	種子	破片	2	炭化材、岩片
		種?	—	—	—	—	種実なし、炭化材、菌核
	北カマド	炭化物	オオムギ	胚乳	完形	1	炭化材、岩片
2号住	カマドフク土	骨?	—	—	—	—	種実なし、骨片
		イネ	胚乳	完形	1	炭化材	
		コムギ	胚乳	完形	1		
4号住	カマドフク土	マメ類	種子	完形	1		
		骨	—	—	—	—	種実なし、骨片
		種	—	—	—	—	種実なし、炭化材、菌核
6号住	カマド焼土	炭化物	—	—	—	—	種実なし、炭化材
		イネ	胚乳	完形	1	アズキ類:初生葉確認	
	アズキ類	種子	破片	—	1	炭化材	
カマド	種	—	—	—	—	—	種実なし、炭化材
	炭化物	—	—	—	—	—	種実なし、炭化材

ある。

・アズキ類 (*Vigna* subgen. *Ceratotropis* (*Piper*) Verdc.) マメ科ササゲ属

種子は炭化しており黒色。やや扁平な楕円体。出土種子は、子葉の合わせ目から割れた半分未満の破片で、残存長2.1mm、幅1.9mm、半分の厚さ1.2mm(6号住;カマド焼土)。子葉内面には、北大基準(吉崎,1992)の「アズキグループ(幼根が聃の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉が確認された。種皮は薄く、表面は粗面。なお、初生葉や子葉合わせ目上にある聃を確認できない個体をマメ類としている。出土した種子の大きさは、1号住;カマドフク土試料が長さ4.1mm、幅3.3mm、半分の厚さ2.0mm、2号住カマド;フク土試料が残存長4.2mm、幅4mm、厚さ2.6mmである。

#### 4. 考察

坂ノ上姫神遺跡の古代の竪穴住居址カマドから出土した炭化種実には、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、アズキ類を含むマメ類が確認された。試料の履歴などを考慮すると、これらの穀類は、当時利用された植物質食糧と考えられる。なお、本遺跡では、隣接する第2地点および第3地点の平安時代の竪穴住居址カマドについても分析調査が実施されており、イネ、コムギ、マメ科、アワ(近似種)、ヒエ(近似種)などの炭化穀類が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2011)。

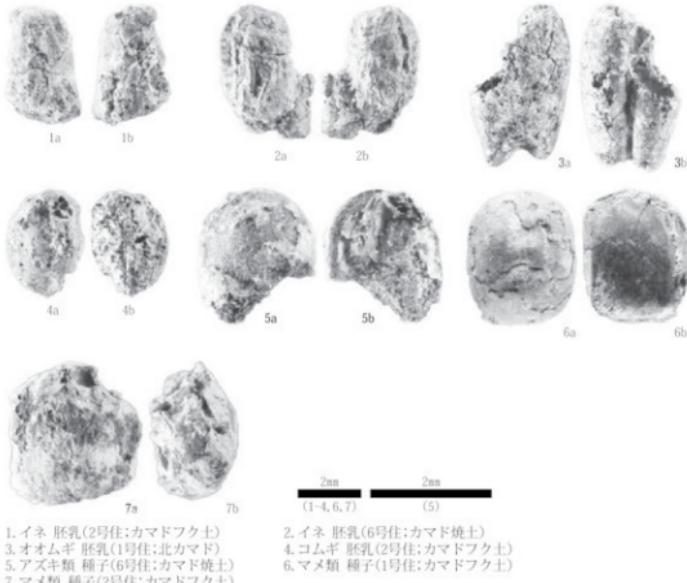
また、周辺域では、本遺跡の北西に位置する野牛島・西ノ久保遺跡の平安時代の住居址ではイネ、オオムギ、コムギ、マメ類、アワ、ヒエが確認されている(柳原,2009・パリノ・サーヴェイ株式会社,2009)ほか、百々遺跡の平安時代の舟形土坑からは多量のオオムギ、コムギ、アワヒエが確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004)。

本遺跡では、オオムギが確認される一方、アワやヒエなどの微小な雑穀類が確認されないなどの調査地点間における検出状況の違いが指摘できる。ただし、遺跡間の比較では、炭化穀類の組成は類似することから、古代頃の本地域では上記した穀類が植物質食糧として普遍的に利用されていたことが推定される。

### 引用文献

- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 柳原功一 2009 「第11節 種実分析」「野牛島・西ノ久保遺跡III・V・VI区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第20集 南アルプス市教育委員会・財團法人山梨文化財研究所,101-103.
- 中山至大・井口口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」 東北大学出版会,642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「野牛島・大塚遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告書」「野牛島・大塚遺跡」八田村文化財調査報告書第2集 八田村教育委員会・山梨県甲府土木事務所,81-86.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「百々遺跡3・5における自然科学分析」「百々遺跡3・5」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第213集 山梨県埋蔵文化財センター編,山梨県教育委員会・国土交通省甲府河川国道事務所・日本道路公団東京建設局,368-376.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2009 「野牛島・西ノ久保遺跡の種実同定と花粉分析」「野牛島・西ノ久保遺跡III・V・VI区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第20集 南アルプス市教育委員会・財團法人山梨文化財研究所,72-79.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2011 「坂ノ上姥神遺跡第2地点および第3地点の炭化種実同定」「坂ノ上姥神遺跡第2地点」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第27集 学校法人きぐく子どもの村学園・南アルプス市教育委員会,27-31.
- 斎藤秀樹 2010 「坂ノ上姥神遺跡(第2地点)」「平成20年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第24集 南アルプス市教育委員会,15-39.
- 吉崎昌一 1992 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』No.355,2-14.

図版1 種実遺体



## 第V章 総括

本調査の結果、竪穴住居址5軒、土坑98基を検出した。第1地点（平成15年に実施した坂ノ上姥神遺跡の試掘調査および本調査地点）の竪穴住居址と溝状遺構、集落の変遷については、第2地点（平成20～21年に南アルプス子どもの村小学校建設に伴い実施した試掘および本調査地点）、第3地点（平成21年に実施した個人住宅（徳永1729-3）に伴う試掘調査）と合わせて『坂ノ上姥神遺跡第2地点』で総括しているため、本章ではその総括の抄録を掲載する。詳細については上記報告書を参照していただきたい。

### 第1節 集落の変遷

今回の調査成果およびこれまでの調査結果から、坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡の広がりと時期変遷をまとめてみたい（第24・25図、第5表）。

#### 1期 縄文時代後期堀ノ内1～2式

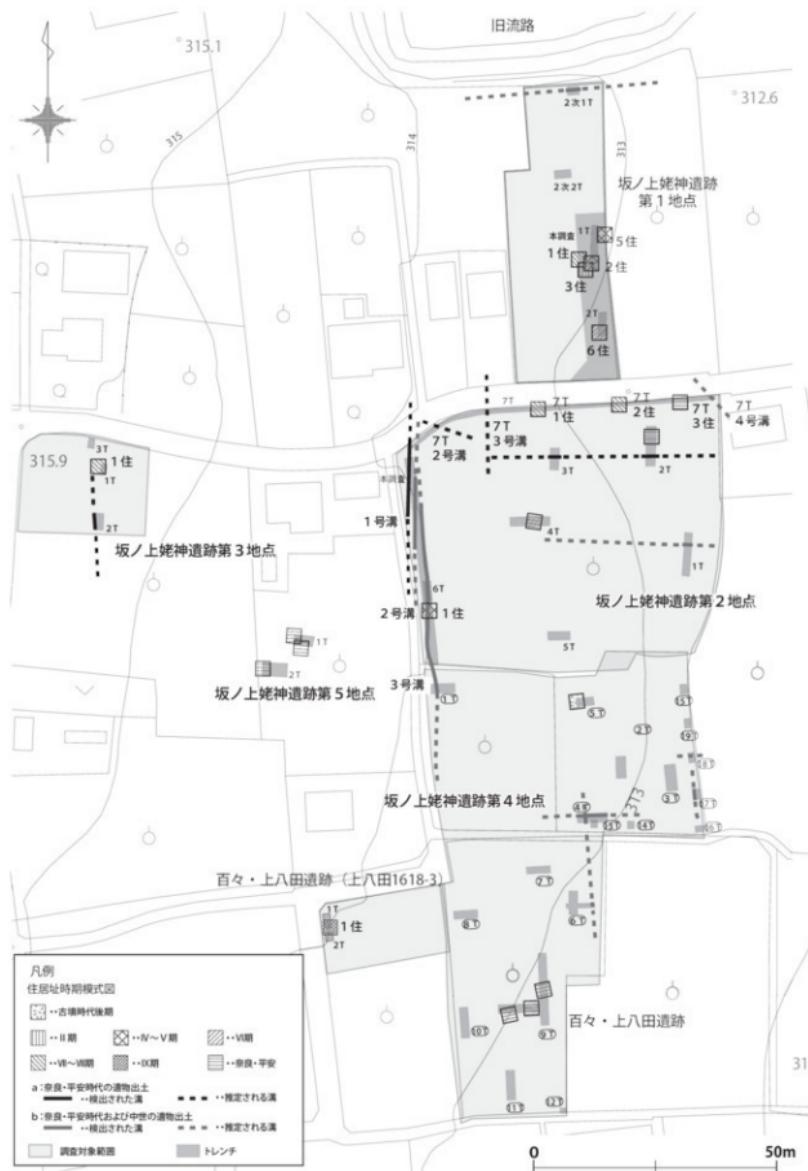
第25図に示した過去の調査地点の中で、上八田下村遺跡、上八田堂前遺跡、百々・上八田遺跡（上八田1557地点<sup>(1)</sup>）、徳永・御崎遺跡、徳永・御崎遺跡第3地点で遺構が検出されている。これらの調査結果から、西は上八田下村遺跡付近から東は浸食崖まで、北は百々・上八田遺跡（上八田1557地点）付近、南は東西に走る深い谷までの範囲が縄文時代後期の集落範囲と推測できる。南側の深い谷は現在でも崖下へ下りる道路となっており、縄文時代後期、この谷が利用された可能性が高い。

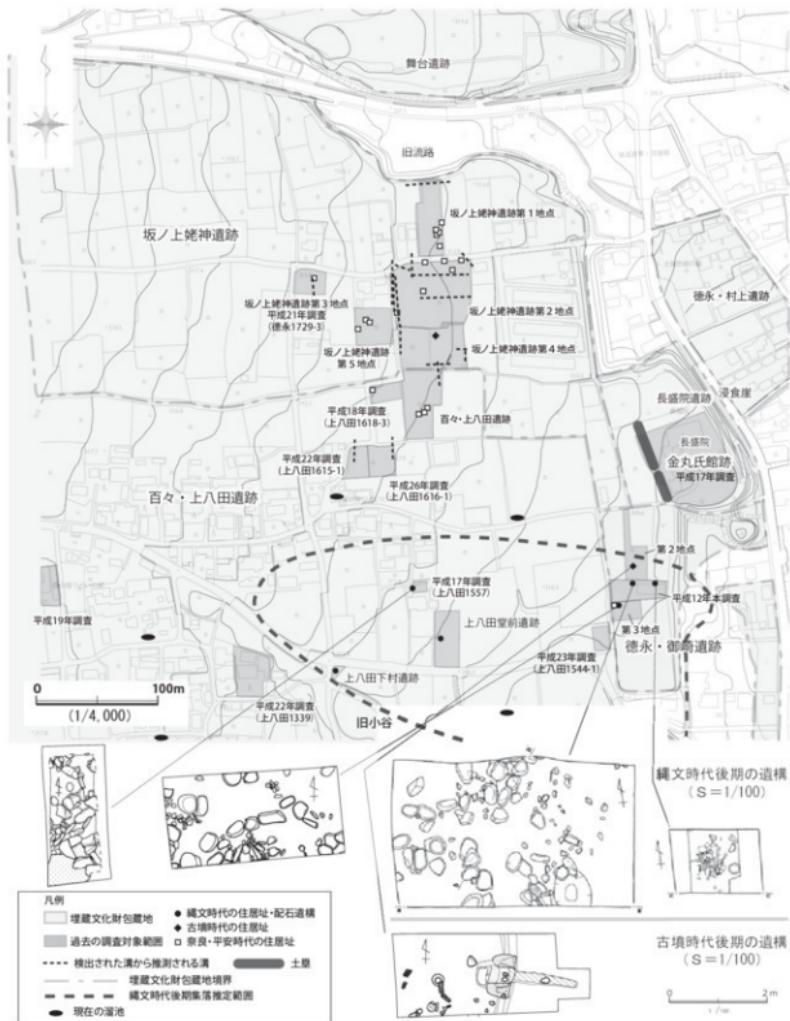
#### 2期 古墳時代後期 県史編年 X期 6世紀第3～4四半期

徳永・御崎遺跡第2地点で竪穴住居址が1軒検出されている。長い煙道を持つカマドが住居東壁に造られていた。この時代の遺構はこれまで実施した試掘調査で1軒しか発見されていないことから、この周辺が集落の外縁か、居住密度が低かったと考えられる。

第5表 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡検出竪穴住居址一覧

遺跡名	調査区分	遺構	年代	宮ノ前	甲斐型	山梨県史	備考
坂ノ上姥神遺跡第1地点	本調査	1号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
		2号住居	BC末	IV	VI	III	
		3号住居	BC中	II	V	III	
		4号住居	—	—	—	—	欠番
		5号住居	BC後	IV	VI	III	
		6号住居	9C前	VI	VII	IV	
坂ノ上姥神遺跡第2地点	試掘調査	2T 住居	奈良・平安	—	—	—	未発掘
		4T 住居	奈良・平安	—	—	—	未発掘
		7T 1号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
		7T 2号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
		7T 3号住居	平安	—	—	—	
		本調査 1号住居	8C末～9C初	IV～V	VI～VII	III～IV	
坂ノ上姥神遺跡第3地点	試掘調査	1号住居	9C後～10C初	VII～VIII	X～X I	V～VI	
徳永・御崎遺跡第3地点	試掘調査	1号住居	奈良・平安	—	—	—	
百々・上八田遺跡（上八田1618-3）	試掘調査	1号住居	10C前～10C中	IX	X II	VI	





第25図 坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡変遷 (1/4,000)

### 3期 宮ノ前II～V期（県史III期） 8世紀中～9世紀初頭

集落が形成され、堅穴住居址が増加する時期である。第1地点2号・3号・5号住居址および第2地点本調査1号住居址が該当する。

### 4期 宮ノ前VI～IX期（県史IV～VI期） 9世紀前半～10世紀前半

第1地点で2軒、第2地点試掘調査第7トレンチで2軒、第3地点で1軒、百々・上八田遺跡（上八田1618-3地点<sup>（注3）</sup>）で1軒、合計6軒検出されている。3期に比べ居住範囲が広がっている状況が把握できる。

### 5期 平安時代～中世 15～16世紀

溝状遺構から15～16世紀の土器が出土していることから、少なくとも第2地点の試掘調査第7トレンチ3・4号溝状遺構および試掘調査第1トレンチの溝状遺構は中世15～16世紀頃まで機能していたと考えられる。16世紀代には、坂ノ上姥神遺跡の南東に隣接して、武田家の重臣であった金丸氏の館が、現在の曹洞宗長盛院の境内に立地していたとされている。甲斐国志に「開山慈照寺ノ二世謙翁宗益、天文中ノ草創、開基玉叟淨金龕主は長盛院ト称ス、金丸筑前守虎義ナリ、金丸土屋二氏ノ牌子ヲ列ス、境内モト虎義ノ宅地ニテ寺ハ他所ニアリ、延宝四年此ニ移スト云フ、今モ里隣ノ形存セリ」とあり、長盛院は金丸虎義の宅地跡に他所から延宝4年（1676）に移されたと記されている。現在でも長盛院西側には幅約3mの虎口を伴う土塁が残されている。こうした点から、これまで発見された溝状遺構の一部は、金丸氏の館を中心とした戦国時代の土地利用に関係している可能性も推測される。

## 第2節 調査の成果と課題

本調査によって奈良時代から平安時代までの各時期にわたる住居跡が検出された。第2地点、第3地点および周辺の調査成果と合わせれば、繩文時代後期から奈良・平安時代、中世まで続く扇状地扇端部の開発状況の一端が明らかとなった。今後は古代から中世における土地利用の具体的变化や八田牧との関係、中世の溝状遺構と金丸氏館跡および浸食崖下に位置する徳永集落との関係解明が課題である。こうした課題を解決するには、今後の試掘調査も含めた一つ一つの調査の積み重ねとそれらの調査成果のたゆまぬ検証が必要であろう。

### 註

（注1） 編年は柳原功一氏が宮ノ前遺跡で行ったものを利用した（柳原功一 1992 「第5章宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』）。

（注2） 南アルプス市教育委員会 2006 「平成17年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第11集

（注3） 南アルプス市教育委員会 2005 「平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第10集



# 写 真 図 版





1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（南から）



3. 1号住居址（南から）

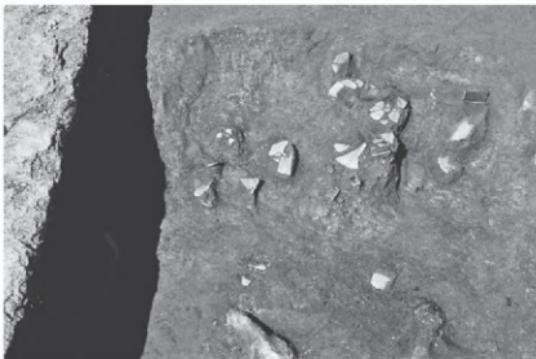


4. 1号住居址遺物出土状況（北から）

写真図版 2



1. 1号住居址全景（東から）



2. 1号住居址北カマド遺物出土状況（南から）



3. 1号住居址北カマド（南から）

写真図版 3



1. 1号住居址北カマド覆土堆積状況および遺物出土状況（南から）

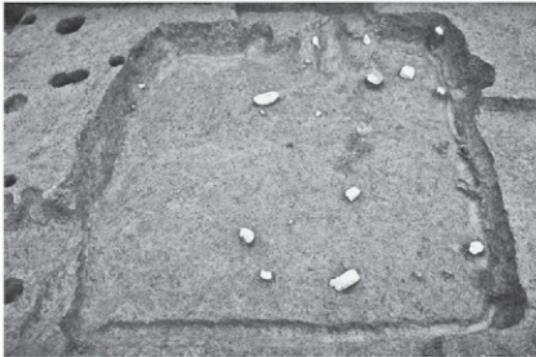


2. 1号住居址内ビット1断面（南から）



3. 1号住居址東カマド（西から）

写真図版 4



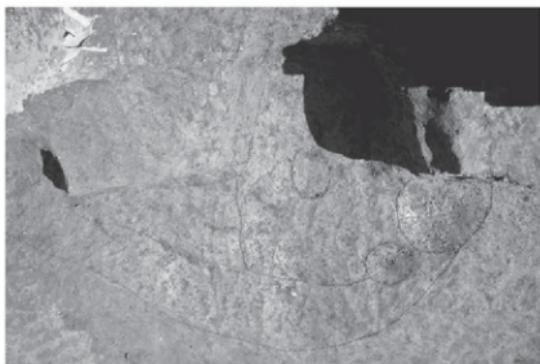
1. 2号住居址全景（西から）



2. 2・3号住居址全景（南から）



3. 2号住居址カマド（西から）



1. 2号住居址カマド掘方（西から）



2. 3号住居址全景（東から）



3. 3号住居址全景（西から）

写真図版6



1. 5号住居址全景（西から）



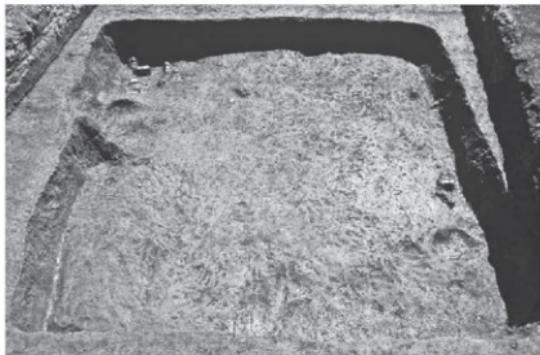
2. 5号住居址全景



3. 5号住居址カマド



1. 6号住居址全景（西から）



2. 6号住居址全景（北から）



3. 6号住居址カマド（西から）

写真図版8



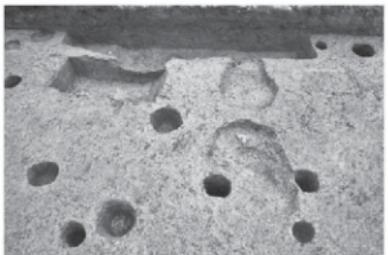
1. 6号住居址明褐色土堆積状況（北西から）



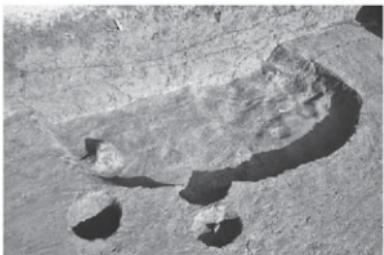
2. 6号住居址刀子出土状況



3. 6号住居址遺物出土状況（北から）



1. 1・2号土坑他（西から）



2. 3号土坑全景（北西から）



3. 1号土坑（北東から）



4. 2号土坑（西から）

写真図版 10



1. 土坑検出状況（A T～A U 9～10）（西から）



2. 土坑検出状況（A V～A W 9～10）（西から）



3. 土坑検出状況（A Y～A Z 10）（北西から）



1. 調査風景

写真図版 12



1住・1



1住・2



1住・3



1住・4



1住・5



1住・6



1住・7



1住・8

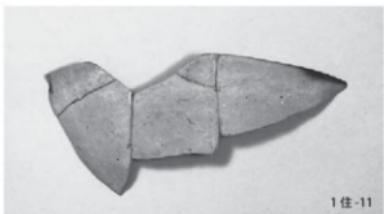


1住・9



1住・10

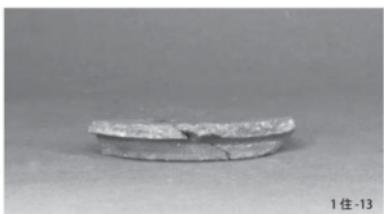
1. 1号住居址出土遺物



1住-11



1住-12



1住-13



1住-14



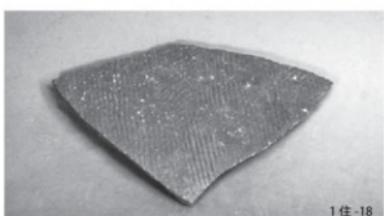
1住-15



1住-16



1住-17



1住-18



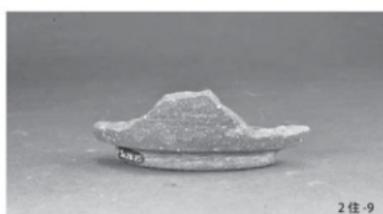
2住-1



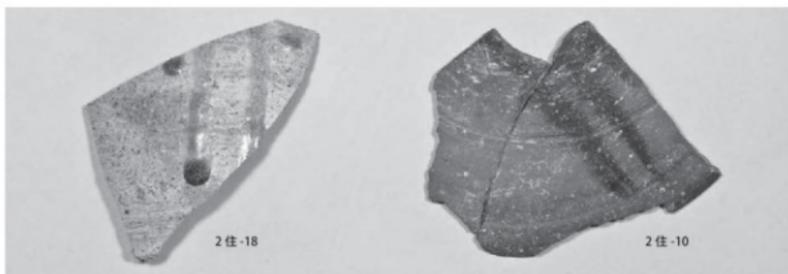
2住-2

1. 1・2号住居址出土遺物

写真図版 14



1, 2号住居址出土遺物



1. 2号住居址出土遺物

写真図版 16



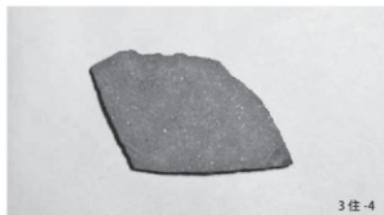
3住-1



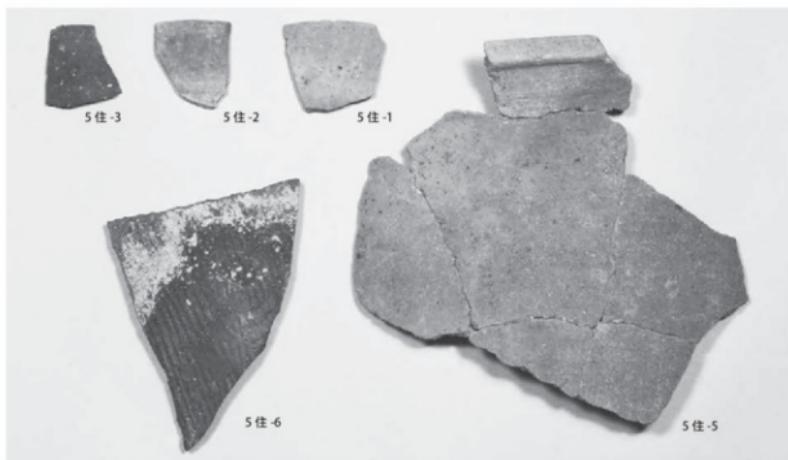
3住-2



3住-3



3住-4



5住-4



6住-1

1, 3・5・6号住居址出土遺物



6住-2



6住-3



6住-4



6住-5



6住-6



6住-7



6住-8



6住-9



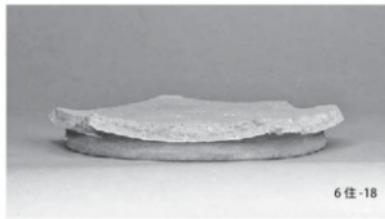
6住-10



6住-11

1. 6号住居址出土遺物

写真図版 18



1. 6号住居址出土遺物



6住・22



6住・23



6住・24



6住・25



6住・石器1



6住・鉄製品1



1土・1



3土・1



3土・2



造模外

1. 6号住居址、1・3号土坑、遺構外出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	さかのうえうばがみいせき
書名	坂ノ上姥神遺跡
副書名	南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	斎藤秀樹
編著機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212 TEL055-282-7269
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな	さかのうえうばがみいせき
所収遺跡	坂ノ上姥神遺跡
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしとくなが 1855 ほか
所在地	山梨県南アルプス市徳永 1855 他
コード	市町村 19208 遺跡 HT-40 (南アルプス市遺跡番号)
北緯	北緯 35° 39' 16" (世界測地系)
東経	東経 138° 29' 12" (世界測地系)
標高	314 m
調査期間	20030903 ~ 20030930
調査面積	162 m <sup>2</sup>
調査原因	南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事
種別	散布地
主な時代	奈良・平安時代
主な遺構	竪穴住居址 5軒 (奈良・平安時代)、土坑 98 基
主な遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子
特記事項	

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第40集

山梨県南アルプス市

坂ノ上姥神遺跡

南アルプス市徳永 1855、1856 番宅地造成工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2015年3月31日

発行者 南アルプス市教育委員会

〒400-0492

山梨県南アルプス市鮎沢1212

TEL 055-282-7269

印刷所 株式会社エンドレス

〒405-0014 山梨県山梨市上石森123

TEL 0553-22-4574

